

Ⅱ．聞き取り調査

Ⅱ．聞き取り調査

1．聞き取り調査の概要

「茶歌」の再発掘と現代的再創造を行うにあたり、以下のように静岡県内の茶文化関連機関に所属する有識者や茶歌の伝承に関係する人々に聞き取り調査を行った。その際、[]内に示した静岡大学教育学部や教育学研究科に所属する学生も同行し、インタビューに加わった。

- 斉藤善樹氏・風間ますみ氏（茶文化振興協会 静岡市北番町 2004年6月1日 大槻・柳沢・小西）
- 藤田文敏氏（茶商工業協同組合 静岡市北番町 2004年6月1日 大槻・柳沢・小西）
- 西村予史男氏（竹茗堂 静岡市呉服町 2004年6月1日 大槻・柳沢・小西）
- 高崎譲寧氏（「茶歌」収集家 沼津市下香貫 2004年6月25日 大槻）
- 大草省吾氏（茶農家 島田市牧之原 2004年7月18日 大槻・柳沢・小西）
- 山村美沙緒氏ほか（特別養護老人施設カリタス美和 静岡市美和 2004年8月3日 大槻 [森・青野・土井]）
- 朝比奈とし江氏（民謡伝承者・故加瀬沢品吉氏3女 静岡市池田 2004年8月7日 [森・土井・青野]）
- 前島重雄氏（民謡伝承者・故前島長作氏の孫 静岡市安西 2004年9月15日 大槻 [ツォク・森・土井]）
- 栗田米一氏（民謡伝承者・故栗田八蔵氏の孫 天竜市横川 2004年11月2日 柳沢 [森]）
- 落合宏雄氏（民謡再創造先駆者・故落合勝郎氏の長男 菊川市本所 2005年7月12日 大槻）

最初に訪問したのは、過去から現在までの茶文化に関する資料が集積されている茶文化振興協会である。そこで、関連資料の提供を受けるとともに、1979年に沼津市浮島地区で茶歌の音源資料収集とその五線譜化を行った高崎譲寧氏を紹介された。

その後訪問した高崎氏からは、大正年代にSPレコードとして収録された静岡県代表者11名による茶歌のカセットテープ2本の寄贈、およびその収録者のうち8名に関する情報提供を受けた。また、牧ノ原茶園開拓当時のドキュメンタリー番組（テレビ静岡）のビデオテープを拝借するとともに、その子孫・大草省吾氏（茶農家）を紹介された。大草氏からは、当時の昔話と民謡（茶節）の失われた時期や背景について貴重な示唆を得るとともに、その経営する茶園を視察した。

藤田文敏氏、西村予史男氏ら茶商工業関係者からは、現代における茶歌のニーズや再創造、奏演の場に関する示唆を受けた。カリタス美和では、デイケア部門で「音楽療法」に参

加している山村美紗緒氏ほかから、民謡や唱歌に関する昔話やその現在における活用と享受の実態について情報収集した。

その上で、上記高崎氏によって提供された大正時代の茶歌収録者リストをもとに、その子孫にあたる朝比奈氏、前島氏、栗田氏を訪ね、その後の茶歌伝承に関する実態調査を行った。特に、栗田氏への聴き取りにより、先に述べた茶歌選手権の11名のリストが栗田氏から高崎氏の手に移ったものであることがわかった。そして、当時の上京に関する茶業組合からの通知文も見せてもらうことができた（写真Ⅱ-1 参照）。しかしながら、茶歌の伝承はこれら子孫には行われていなかったことも判明した。

一方、落合氏からは戦争中の1940年代に現・菊川市周辺に滞在した外部からの兵隊と地元の人々との暖かい交流の中で行われた地元の茶摘唄の再発掘と再創造、そしてその後2000年代初頭に至る発展のエピソードやこれに関する資料提供を受けることができた、なお、落合氏は本プロジェクトの活動紹介をした『静岡新聞』の記事（2004年6月8日夕刊、を見て、問い合わせをして下さった。以下では、これらのうち朝比奈氏、前島氏、栗田氏への聴き取り調査内容および落合氏への調査内容概要を発言者による許諾訂正、一部カットの上掲載する。

2. 朝比奈とし江氏への調査記録

（民謡伝承者・故加瀬沢品吉氏3女 静岡市池田 2004年8月7日 [森・土井・青野]）

朝比奈 こんにちは、ようこそ。私 加瀬沢品吉の三女とき江です。

こちらがわたしの息子です。その隣が、私の兄に代わって義姉の加瀬沢ミナ子さんです。

加瀬沢 （父の写真を出して、ひろげてみる）

朝比奈 このメンバーが、唄い手の父と・・・右の女の人二人が「付け」（囃し方）っていうのかしら

加瀬沢 合いの手ね。

朝比奈 女の方が一人亡くなられ、その代役を母〔筆者注：品吉の妻。以下、筆者による付記は〔 〕内
で示す〕がやることになり、あとで父からほめられたことがあったね。

加瀬沢 お母さんが言っていましたね。そうそう、品吉さんは、マジックもやったんですよ。とってもすご
いおじいちゃんだったのですよ。易学士の免状も持っていたし、大正から昭和の時代にハーレー〔アメリカ製大型バイク〕乗りまわしたとか。この前テレビで全国のなんか集まった
のを見て主人にね、「おじいちゃんハーレーに乗ってたわね」っていったら「ハーレーどころじ
ゃない。その前のインディアンに乗ってたんだ」って。この写真を見て、車も運転していたよ。

朝比奈 わたしの次男が大学時代親の反対を押し切って友達と二人、オートバイで北海道まで行ってしま
った時、父にそれを話すと「血は争えないものだ、俺も心配をかけたからな。お袋が仏壇の前で
経をあげていたそう。大丈夫だよ」と励まされたことがあったよ。父品吉は、明治33〔1900〕
年2月に、静岡県庵原郡小島村小河内で生まれた。

朝比奈和央〔朝比奈とし江氏の長男〕小河内というと、今の清水市〔現・静岡市清水区〕で、興津川の上流

の山間部だね。

朝比奈 そう、緑の山に囲まれ、すぐ裏には川が流れていたね。現在の国道 52 号線の沿道筋で、両親は旅籠屋を営んでいた。父親（祖父）は絵が得意で、菩提寺の天井いっぱいに竜の絵が残っているよ。大正 11 [1922] 年、隣村の早瀬まさと結婚し、父は務めの都合で豊田村 [現・静岡市東豊田小学校付近] の池田派出所（中部電力会社）に務めた。

加瀬沢 会社でも 1 日・15 日の朝礼の時、祝詞をあげ社員の健全を祈願して神主役をつとめたんだって。多才な方だったのね。大勢の集まりの時は、歌ったり、マジックをやってみんなを楽しませたりして。（新聞の切り抜きをみて）

朝比奈 おや、これ電気組合の新聞だね [昭和 42 (1967) 年、父・品吉氏が 67 才のときのもの]。天狗道場の欄に父と兄の子の 2 人が写ってる。「…社会奉仕に人の一生をみる家康みたいな人…。おぼしめしをもらったら手相をみる目も狂う、といって、みんな社会福祉の団体へ贈りたい」とこちらの、静岡新聞ね [昭和 46 (1971) 年、父・品吉氏が 71 才のときのもの。市の民生部長と共に写っている]。「…8 年こつこつ貯金して、9 万余円を交通被害者に寄付…」。

朝比奈 中央 9 万余円ってあるからね、9 万円以上だよ。

朝比奈 父の遺言に「あると思うな親と金。兄弟仲良く」と。

加瀬沢 そうでしたね。

朝比奈 あっ、こっちの写真は尺八で放送しているところだね。（裏を見て）第 5 回放送記念と書いてあるね。放送は茶節だけだと思っていたけど、尺八もやったんだね。

父は 55 才で定年退職し、母の営んでいたタバコ・薬の店を手伝ったり町内会長をして、よく働いた人だった。子煩悩だったが、躰は両親ともに厳しい人だった。

ある日「東京へ行ってくるよ」って。80 才になった頃かしら。コマ劇場が出来た時だった。NHKの方のお世話で、舞台に立たせていただいた。帰ってきた父は、とっても嬉しそうに「舞台にスーッとエレベーターのように上がり、富士山と一面の茶畑、そこで一声あげたら万客の拍手だった。『日本一の茶節名人』と紹介された。」と、それはそれは幸せいっばいな姿。その姿こそ、私にとって父の人生における有終の美を飾った思いだった。

父は、昭和 58 [1983] 年 83 才で亡くなった。17 回忌を迎えようとした折に、沼津市に住まわれる高崎譲寧先生から、父に関係する資料を沢山お送りいただいた。

[平成 9～10 (1997～1998) 年にかけて] わたしは、その中の写真や新聞の切り抜きを夢中で整理した。母からよく聞かされたことがその新聞の切り抜きに書いてあったの。それは「昭和 5 [1930] 年（私が 3 才のとき）昭和天皇が県内をご訪問なされ御用邸でお休みのひととき、茶節を唄ったんだよ。あんたが中耳炎の手術のあと破傷風で関節など炎症をおこし、メスを入れられ、生死をさまよっていた最中だったの。お父さんの思いはどんなだっただろう。その後あなたは生き返ったの。思いがとどいたのだろう。」

加瀬沢 この記事みて（『静岡新聞』平成元 [1989] 年 2 月 5 日県内版）。「大正 15 年に収録した幻の茶節レコードが発見された」って。

朝比奈 ここに「1 市 24 か町村から 41 人出て、このうち日本一の茶節名人と言われた加瀬沢品吉さんを

はじめとして11人が3枚のレコードに吹き込まれた」。でも3枚目は未だみつからないそうよ。そうして、これらは「東京・愛宕山のJOAK（現在のNHK）から25分間にわたって、全国の茶の間に放送され評判をとった」。この吹き込みから3年後に「《ちゃつきり節》が生まれたんだって。ここに県茶業の会長さんが「茶節は、茶摘み・手もみといった茶作業のリズムをとり、茶所では唯一の娯楽として唄われた。これを機に本県茶業の振興に役立てたい」って。

朝比奈和央元気なおじいちゃんがあらわれそうだね。

朝比奈 高崎先生から 県立中央図書館にCDがあるということを教えていただき、先生ご自身もわざわざ聞いてこられたとのこと、その熱意に心打たれた。「お茶の出どころは安西茶町、つけて流すが宮崎…」[「茶もみ唄」の一節]と。父の声がきこえてくるようだ。

加瀬沢 高崎先生から沢山の資料をいただき、今まで知らなかった父を兄弟で話し合っていたところだった。今日はこのようなお話し合いの場をいただき、この上ない品吉さんの供養になった。

3. 前島重雄氏への調査記録

（民謡伝承者・故前島長作氏の孫 静岡市安西 2004年9月15日 大槻 [ツォク・森・土井]）

前島 10年くらい前に沼津の高崎先生から電話と手紙が来て、お茶の歌っていうのかな、茶つきり節のようなのを大正時代に記録したと。その時うちのおじいさん・前島長作とあと2人だか3人だかくらいで、日本で初めて録音をしたって。それで、何か資料があるか、それとも昔の人がこの近くにいたら[紹介してほしい]っていうことだった。そういう話があったっていうのは、記憶にはあるだけだね。昔、小さい頃の話だもんでね。関係した人が、もうほとんど亡くなっちゃってるもんですからね。お茶屋さんにしても、今やってる人は私より若い人のほうが多いもんでね。うちも、昭和20年6月19日から20日にかけての静岡空襲の時にみんな焼失しちゃってると思う。うちだけじゃなくて、いろんなものがね。うちのおじいさんが明治20[1887]年の生まれだもんで、その下の100歳くらいの人が生きてれば話はあるかもしれないけど、そういう人もこの辺じやいないもんでね。

ツォク 90歳代の人はいないか。

前島 どうかね。お茶に関係ある人はわかるかもしれないけど。今はお茶のブームとかいろいろ活発だけど、昔はそういうのはあんまり無かったと思うね。

土井 この辺もやっぱり昔はお茶畑とかあったのか。

前島 こころ辺・安西は、お茶畑じゃなくてね、現在もそうだけど、お茶屋さんっていうか、お茶を再製する工場が盛んだったね。安西通りのほとんどがお茶屋さんだしさ、茶町っていうのがお茶の町。お茶屋さんっていうのは、農家の人が荒茶っていうのを作って、それを仕入れてきて再製していく。よくお茶屋さんは言ってるけど、[生産したままの]お茶を入れると、でっかい葉っぱになっちゃったり小さいのがあったりさ、かつこ悪いわけじゃん。んで、いろんな形を揃えたり、ブレンドって、混ぜていろんなその家の味を出すとか…。今はどこどこ産とか、静岡産のものだと思ってうるさいわけじゃん。

土井　じゃあ、その工場とかで茶唄などが歌われていたのか？

前島　だと思うね。お茶を再製してる間にね、口ずさんでたりしたかもしれないね。

ツォク　そしたら茶摘み唄とは違う。

前島　そうですね。もう1つは、僕思うにね、その当時もやはりある程度、宣伝の目的もあったと思う。明治の終わり頃から大正にかけて横浜港から量は少量だったけど、輸出した歴史がある。

ツォク　輸出先はヨーロッパか？

前島　アメリカとか。だもんで、資料がちよっと……ないもんでね。[祖父の] 前島長作の写真が多分あると思う。

土井　唄は聞いたことがあるか？

前島　いや、ないです。

森　長作さんが亡くなったのは？

前島　昭和36〔1961〕年頃だったかな。確か76歳って書いてある。

土井　唄が上手だったことは知っていたか？

前島　わかんない。身内で歌ったこともないし。

土井　前島長作さんは、お茶の仕事をしていたのか？

前島　再製工場へ70歳近くまで勤めていた。

土井　11人のうちに選ばれたという話を聞いたことはあるか？

前島　うん、昔、聞いたような聞かないような。

土井　どうして選ばれたのか？

前島　わかんないけどね。

土井　上手だったと評判だったのか。

前島　お酒も飲む人だったからさ、飲んだら歌いたくなっただかも知れない。

土井　工場の中で、唄をうたったのか？

ツォク　唄の内容はお茶に関係した唄だったのか？

前島　お茶に関係した唄らしいっけよ。

ツォク　茶摘みの唄じゃなくて、工場で仕事しながらうたう唄か？あるいは、どこからか流れてきた歌か？

前島　よくわかんないけど、流れてきた唄だかしんないしね。《茶つきり節》みたいのかもしれないし。

土井　お茶を摘んで、工場で茶揉みとかをやっていたのではないか。

前島　明治時代は手揉みをやってるとこはあったが、大正時代から昭和にかけて機械化されていった。今は、だいぶ変わってきただろうね。ここら辺にはね、昔は水囊屋って言って金網屋っていうのかな。大きい、細かいのとか粗いのか、篩を作っていたところがここの近くにも他にも結構あった。今はそういう商売の家はないけどね。お茶を篩にかけて、粗いのか小さいのか振り分けた。今なんか、違う方法らしいだけだね。

土井　前島さんは再製工場とかに行った事はあるか？

前島　僕は行ったことない。

土井　お茶に関する仕事は？

- 前島 したことはない。
- ツォク 今でもそういう昔のやり方でやってる工場はあるか？
- 前島 全部、近代化してる。昔は農家の人がお茶を摘んで、荒茶にして売るわけでしょ。だけど、お茶は一番茶、二番茶、三番茶って言って、ずっと一年中採れるわけじゃない。だから、一番茶が採れたときにたくさん再製工場じゃ仕入れる。だけど、置いとくわけにいかない。今は冷蔵庫とかにみんな保管してあるだよ。昔はこの辺にやたら置いとくと、ビニール袋とかなかったから紙の袋なんかどうしてもしっけちゃうだよ。だもんで、茶箱っていう中に亜鉛板が貼ってある箱に保管していた。ここら辺のお茶屋さんでも、ビニール袋のちゃんとしたのやアルミの袋とかがあるで、茶箱を使ってる家はもうないからさ。
- 森 お茶はどここの農家で作っているか。
- 前島 ここら辺では、山に近いような人のところは大概作ってるね。羽鳥とか、それよりもっと上の方。山の人って言うか、そういう人は大概作ってるね。昔は、個人個人で摘んできたのを荒茶にしてこういうところへ売ったわけでしょ。今は大きい村とかで共同で摘んできたのを集めて、売るにも茶市場っていうのが北番町にある。全国や榛原とか富士とかのお茶が集まる。そういう仕組みだよ。
- 土井 荒茶とは、どういうものか？
- 前島 摘むとしおれたりして色が変わっちゃう。そこで、蒸気と熱風で蒸かす。昔は、蒸籠で蒸かした。それを少し手でこうやって揉んで。蒸気をかけるとね、蒸かしたような感じになる。最近では、それを揉む機械っていうのがある。大きいのか小さいのかいろんな形があるけど、それをこういう再製工場へ持ってって直接売る人もいれば、特に東京へとか鹿児島へとかに売るなら茶市場を通す。榛原のお茶、富士のお茶もある。
- ツォク 静岡県外の、例えば鹿児島県のお茶もくるのか？
- 前島 来る。お茶もだんだん暖かいところから当然成長してくるだもんで、向こうから順番に成長してくるから。
- ツォク 静岡県のお茶の民謡は、他県からの影響もあるか？
- 前島 それはあるかもしれないね。京都の方でも採れるし、もちろん鹿児島とか九州の方も。

4. 栗田米一氏への調査記録

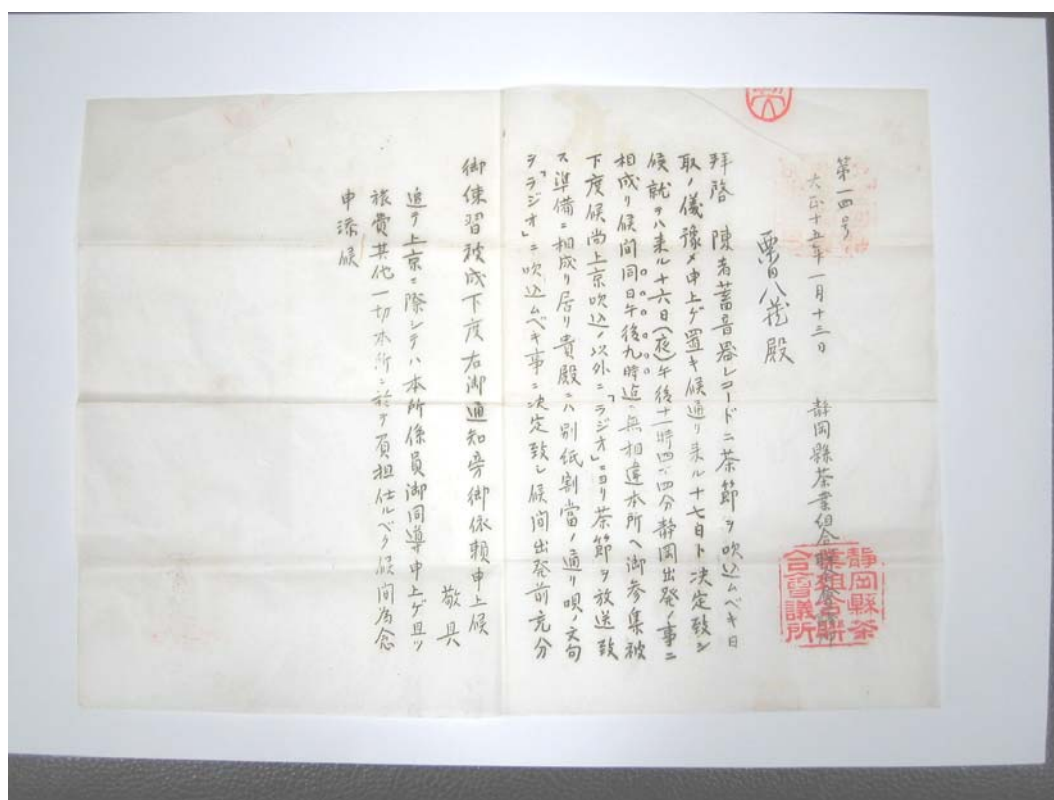
(民謡伝承者・故栗田八蔵氏の孫 天竜市横川〔現浜松市〕 2004年11月2日 柳沢〔森〕)

- 柳沢 今年調査を始めてから出てきた資料のうち、新聞に昔のSPが発見されたという記事があった。そのときのSPを複製してCDにしたものを持ってきた。これが当時選手権に行かれた方の名簿だ。
- 栗田 これは、4～5年前に高崎さんからお電話をいただいたとき、私が高崎さんに送ったものだ。天竜の栗田姓のお宅に洗いざらい電話されたそう。
- (資料を見せていただく)

栗田 これがその当時の、「選抜されたから大会に行けますよ」という文章だ。

柳沢 大正 15（1926）年、印鑑なんかも鮮明に写っている。

栗田 この「選手としていった」方たちが、「こういう文句〔歌詞〕の歌を歌ってましたよ」というものだ。レコード盤は紛失したみたいだ。



写真Ⅱ-1 栗田米一氏所蔵の選手権招待状 2004-11-2 撮影：柳沢信芳

（歌詞の載った資料を見ながら）

柳沢 茶もみ唄をうたわれていたわけだ。

栗田 うちのおじいさんも、この歌詞を持っていったと思う。

柳沢 当時は録音だけだから、〔録音本番のときに〕見てうたったっていいわけだ。当時、東京まで行くのは大変だっただろう。

栗田 ここから、旧光明村にあった今で言う農協の支部みたいなのところに行って、そこから〔恐らく自転車〕で浜北あたりを経由して静岡まで行き、夜 11 時 46 分に汽車で静岡駅を出発したとか何とか。

柳沢 ここまでこの地域が盛り上がっていたのは、よっぽどお茶が脚光を浴びてた時代だったからだね。

栗田 他にお金になる作物がなかった、という時代だったのではないか。

柳沢 その当時のお茶は手もみだったとか。

栗田 手もみの経験者も、まだこの辺にいる。

柳沢 こういう唄の採集が始まったのは、今から十何年前で、その当時の人の唄を録音したりとか採

譜したりとかした時代があった。それがいろんな出版社やレコード会社にストックされて出版された。で、もう終わった形になってしまった。それらがその後どうなったかという、図書館に入ったりとか、どこかの倉庫に入っちゃったりとか、自宅に行ってもそれぞれの家の押入れにあるとか。それを現代でもっと生きたものに出来ないか、再創造出来ないか、ということも今回の目的だ。それから、その当時〔十数年前〕録音した方というのは、そのときでもだいぶお年の方なので、今たずねてもなかなかいない。「いま、眠っているものを再創造して、喫茶店だとかもっと大衆の集まる場所で、音としてみなさんに還元できないか」ということで、作曲の大槻先生と民族音楽の研究をしている小西先生とそれから私とがこの研究に取り組み始めた。

栗田 表に出るようなものが出来れば、故人も大変喜んでくれると思う。

柳沢 ゆくゆくは、調査書や報告書に書いたりとか学会で発表したりとかはする。そのほかに、県民なり、静岡市や県の中で何らかの形で再現できないかと。こういうもの〔昔の資料〕を今読んでも、生活に密着している感じがする。

栗田 最近、お茶をコンビニにたくさん置いたり、お茶が体にいいとかカテキンがいいとか、前向きな形でお茶の売り込みがされている。私も関心を持って新聞の切り抜きを取っているが、平成 9〔1997〕年の記事には、お茶を一日 10 杯飲んでるお茶どころの人は病気にかかりにくいとかいったようなことも書いてある。お茶の芽を取って製造に入るまでの期間に、農薬をかける。その農薬の規準を守っていなかった人もあって、4 年くらい前から基準をきちんと守ろうということで、共同製茶組合でいつどんな肥料をどのくらい与えたかという栽培履歴を組合のみなさんがみんな記帳して、それを組合が一括して監査みたいなことをしている。お茶が以前と比べて関心を持たれるようになったのは、ひとつにはそういうこともあるんじゃないかなと思う。安心して、飲んでいただけるし、きちんとしたものでないと業者も買ってくれない。

柳沢 今は、お茶は買うものという意識が出てきた。以前は入れて飲むのが当然だったのに。また、最近は、外国のお茶だと色々な種類のお茶がある。そういったものの影響はどうか。

栗田 好みによるし、若い人たちは紅茶だとかが好きみたいだ。お茶の効能が本当に知れ渡っているのか。昔はお茶とお茶菓子を出して、世間話だとか言うこともよくあったけど、今はそうじゃない。昔のよさというのも今ではなかなか難しい。

柳沢 お茶がとりもつものがあったわけだ。今もお茶の輸出をしているのか。

栗田 今もアメリカやその他の国にもしている。又輸入も方々の国からされている。

柳沢 生糸は？

栗田 やりましたね。ここでもおじいさんの代くらいまではやってたと思う。子どものころは畑もたくさんあった。」

柳沢 今栗田さんはお茶を中心にやっているのか。

栗田 お茶だけで生活も出来ないんで、他にしいたけと山の仕事とかを合わせてやっている。最近は材木の需要も少なくなった。貿易の自由化で一番最初になされたのも材木だ。育てるのに 70~80 年かかる。

柳沢 この辺は、雪は降るか

栗田 めったに降らない

柳沢 夏は暑いか

栗田 そうでもない。ほんとに古い家で 200 年くらいたっていて、もう私で 7 代目だ。
これは、うちの父親が手もみをしているところ（写真）。下から薪をくべて、薄い鉄板を網の目のように組んだものを敷いて、周囲を赤土で固めて火のいくところだけあけてある。その上に薄い鉄板をひいて、「渋紙」って昔よく言ったのだが、柿の汁を厚い紙にぬるとかなり丈夫になる。その上に蒸したお茶を転がす。蒸した葉っぱはもまれて細くなる。それが終わると「もみきり」といって玉になったのをほぐしていく。機械より香りがいいような感じだ。保存会が昔はあったが、今も旧天竜市にある。今は、お茶だけやっている家も少ない。父親は、よく保存会に行っていた。写真も保存会のときのものだ。

柳沢 お父さんの頃は、お茶一本でやっていたのか。

栗田 そうだ。お茶が好きで、お茶作りも好きで。昔は〔飲み物は〕お茶しかなかったからみんなよく飲んだ。生産量も今より少なかったけど、それなりに完売も出来た。今はいろんな飲み物があって。もっとお茶をたくさん飲んでいて人は病気になりにくいとか、ピーアールしてもらいたい。

柳沢 今日掛川から金谷をずっと上がって、森町から豊岡村を通ってきたが、山のほうもずっとほんとお茶という感じだった。牧ノ原は、徳川吉宗が幕府の家来たちを連れてきてそこら辺を開拓させたと聞いたが、こちらはどうか。

栗田 この辺では、そういうことは聞かない。

柳沢 こちらは古いのか。

栗田 そうですね。もう 200 年ぐらいになる。この、後ろの木〔柱〕なんか栗の木だ。よく先代が話をしたのだが、昔は電気がなかったから松を山から拾ってきて、それを割って大きな鉄なべに入れて松で明かりをつけていた。

柳沢 これだけの木造だとしっかりしている。

栗田 これ〔梁〕をわからないようにずっと囲ってしまおうと思ったのだが、息子が、このまま残しておいてくれって言うのでこのままにしてある。

柳沢 内装を変えても土台は 200 年。

栗田 はい、石の上に乗せてある。

柳沢 親戚は、まわりにいるのか。

栗田 親戚の付き合いはしてないが、この部落 32 戸のうちの 14 戸ぐらいは栗田だから、元をただせばきっとそうだと思う。ここと同じくらいの部落で、半数近く同じ姓を名乗ってるとも聞く。」

柳沢 小学校はここの外に出ないといけないから、子どもたちはちょっと大変だ。

栗田 只圭トンネルの川向こうに小学校がある。天竜市もそうだが、中学校 5 校の生徒も少ない。「みんな気心が知れているという面ではいいかもしれないが、ライバル意識とか共同で何かをやるときには欠けた面も出てくるんじゃないだろうか」と色々な考え方の人がいて、30 人、少なくとも 25 人以上のクラス〔編成〕でやろうとっている。山も、貿易の自由化でだんだん材木の単価が安くなって、需要も減っている。少し単価が上がってきたら、皆さん生活費が必要だからということ

で切る。最近、国の植林の決まりで個人的に山に入る山師が少なくなり、森林組合にお願いしてやってる方が多い。個人的に人を雇って植林をする技術を持った職人は、私らぐらいから下にはもう数えるくらいしかいない。これから先山を維持管理したり山へ入ったりする人が少なくなると、土砂災害とかいろんなことも考えられる。

柳沢 手入れが必要だ。山を知らないといけないからしょっちゅう行かないといけない。頭でわかっていても体で覚えなきゃだめだ。

栗田 山の仕事は大変だ。山に入って仕事をしようという人はもうほとんど言っていないくらいなくなった。」

柳沢 持ってるだけでも税金はかかる。

栗田 もし伐採して一気に雨が降って災害になってはいけないから、家で山を管理できないのであれば組合に言えばできる範囲は手入れをするという補助事業がある。最近、山を持っている方でも結構お茶を一生懸命やるようになった。

柳沢 お父さんは、茶摘の唄はうたったか。

栗田 親父はもう歌わなかった。

柳沢 おじいさんがうたっていた記憶があるか。

栗田 非常に性格の明るい人で、常に仕事中でも歌を口づさんでいた。

柳沢 お茶の仕事か。

栗田 そうだ。当時は手摘みだった。

柳沢 単調な仕事だからそういう唄が出てきたのだろう。

栗田 今みたいに方々から情報が流れてくることはなかったし、せわしくなかったろうから、のんびり茶節をうたいながらやったのだろう。健康の維持管理も出来ただろうし、お茶を作るにもせかせかしないで気持ちものんびりしてやったから、いいものが仕上がっていったとも考えられる。

柳沢 ほとんどは一人でうたっていたのか。寄り合いなどにはみんなでうたったこともあったのか。

栗田 集まったときには、うたってる人に対して後から「そうだそうだ」とか追い掛けと言うか歌ってる人に対して力づけをするということがあって、そこで一息入れて次をうたうことはあった。

柳沢 前の世代から歌いつないできたため、楽譜はなかったのか？

栗田 楽譜はなかったが、張るところとか抑えるところとかメリハリをつけてうたっていたところを見ると、多少のリズム感はその前の祖先から受け継いだかも知れない。

柳沢 楽器は特になかったのか。

栗田 歌だけだ。この八蔵さんがうたった唄のメロディは、誰が作ったのかと考えることもある

柳沢 奥さんも、八蔵さんの歌は聞いたことがあるのか。

栗田夫人 93 歳まで元気でいたから、この辺歩きながら大きな声で毎日のように歌っていた。ほんとに歌好きでね。

柳沢 そういう方は周りにもいたか。

栗田 この地域ではない。

栗田夫人 八蔵さんは明るい人で、ただ歩くにも踊りながら歩くような感じだった。当時は、若かったから「ま

たかー」と聴いていた。亡くなる前にも、磐田までご祈祷に一人で行った。結構丈夫なおじいさんだったが、ある日ぱったり逝っちゃった。今ではほんとに懐かしと思う。

栗田 歌をうたったりなんかすると、ご近所にも恥ずかしいような気持ちだった。お酒でも飲んで酔っ払っているんじゃないかというくらいだったから。本人はそんなことお構いなしだった。子どもも12人も持って、苦労の中に憂さ晴らしというか、明るく生きなきゃということで、あえてそういう風にしていたんじゃないかなとも思う。

栗田夫人それを受けついでおか、主人もうたが好きだ。あのへんのトロフィーも全部静岡とか島田に行って、歌謡曲の大会でもらってきたものだ。カラオケの機械もある。

栗田 カラオケは周りの衆にも親戚のものにも好きな人がいるから、ここに集まる。八蔵さんのときもここへたくさん人が集まっていた。[八蔵さんには]人を寄せ付ける力があつた。「よく人が来て下さるよううちでなければいけない。人が寄らないうちはだめだ」と言っていた。



写真Ⅱ-2 栗田八蔵氏の写真 2004-11-2 撮影：柳沢信芳

柳沢 あの賞状は何か。

栗田 しいたけで静岡県で一番になったときのものだ。小淵敬三・元総理が日本しいたけ協会会長をやっていたときに私の保有数が3,000本だった。指導員、農林事務所の菌屋、農協、役所から皆さんが来て、しいたけの木の鑑定をしていただき、私に勝る人がいなかった。

柳沢 どのようなことで評価されたのか。

栗田 植林してたくさんしいたけの出るホダギづくりをしたからだ。そういうコンクールがある。柳沢3,000本では、手入れが大変だ。

栗田 一時期中国からも輸入[品]がたくさん来て、とても採算が上がらない時代もあり、ぐっと原木を減らした。これが御岳教のものだ[八蔵氏の父の身に不幸があったことがきっかけで、八蔵氏は御

岳教に入信し、長野県の木曾御岳山登山を始めた。米一氏も4回ほど御岳登山の経験がある]。

柳沢 昭和54[1979]年という、今から36年前だ。それまで行っていたのか。

栗田 一軒のうちに、どなたかが病で休まれてるとか、今みたいに水道がないもんだから井戸を掘るのにどっちの方向に掘たらいいかと方位の鑑定をしたり、悪い病になったら「護摩」と言って、檜を細く指ぐらいの太さに割って、大きな鉄なべでたいてお祓いをしたみたいだ。出入りの本当に多い家だったので。

柳沢 そういう方じゃないと、なかなか東京まで行かない。この歌詞は誰が作ったかはわからないのか。

栗田 私は、自分たちでそれぞれ歌詞を考えたんじゃないかなと思う。

柳沢 節も自分たちで作ったのか？

栗田 節は、うちのおじいさんの場合だと遠州節とか。駿河節が基本で、それにちょっと変化を加えたような感じがすると何かの総評に出ていた。家畜も好きだった。豚とかヤギとかをこの下の方で飼っていた。小鳥も大好きで、静岡の人が二人来て朝早く出て一緒に取りに行き、たくさん飼っていた。この山をずっと上に上がっていくとちょうど尾根の頂上だもんで、そこでメジロが取れた。静岡のほうでは、何分鳴き続けるかで大関だとか横綱だとかって階級がある。餌の青葉をすって魚の粉を混ぜてちょっとやわらかめにして与える。それを続けてやると、メジロの毛並みもきれいになるし、さえずりの時間が長くなる。こちらで取って持っていったのが2羽だか横綱になったので、この辺で取れたメジロがとってもいいとかって言って、それがきっかけでこちらへ毎年のように[静岡から]メジロ捕りに初夏の頃来た。

柳沢 もちで捕るのか。

栗田 もちを棒へ巻いて、いちごだか何か赤いのを吊して置くとえさだと思ってやってきて、それで捕れたとか。

柳沢 昔はそれが遊びだった。蜂を追いかけてたりとか。今はそんなことはやらないから、自然のことがわからない。

栗田 栗田夫人おじいさんが家を空けることが多く、留守をすると同じように餌を作って与えても必ず死んでしまった。

栗田 このくらいのもすり鉢みたいので、魚をつぶして、野菜はうちにある菜っ葉を取ってきて言われたように調合したつもりだったが、与える人が違うと死んじゃってまいった。ヤマガラは、落花生と水があれば大丈夫でよかったけど、メジロは難しかった。時期的に、お茶摘みしてるとお茶の木の中へホオジロが巣を作っているのをたまたま見つける。雛は、ちょっと何かやると親だと思って口をあける。そんなのを見つけると捕ってきてうちの鳥かごへ入れて、えさを与えたり。おじいちゃんは、そんなことを好きでやっていた。動物をかわいがる気持ちが結構強かった。

柳沢 そうなのが、歌心にも出たのだろう。音楽が人をそういう風にするのか、そういう人だから音楽が出来るのか。明治時代から「音楽が情操を育てる」と言われて、義務教育にとりいれられてわれわれが音楽をやってきたわけだが、もともとその音楽をやりたいというか音楽の素質がある人がいて音楽が発展してくるのか、そうじゃなくて何にもないところに音楽が来て人間が発展するのかというと、なかなかこれは難しい。だから音楽だったら何でもいいかと言うと、必ずしも

その人を豊かにするかとはいえない部分があるような気がする。いま、音楽療法も流行っているが、何でもかんでも一方的な考えだけでやっていくと変な間違いがあるのではという気がする。やっぱり人間性なり、心のあり方みたいなものと並行して音楽をしていくことがポイントかと思う。

5. 落合宏雄氏への調査概要

(民謡再創造先駆者・故落合勝郎氏の長男 菊川市本所 2005年7月12日 大槻)

落合宏雄氏は、父・落合勝郎氏が六郷小学校[現・島田市]教員であった昭和18～20[1943～1945]年頃の思い出話を語ってくれた。その概要は、以下のようである。

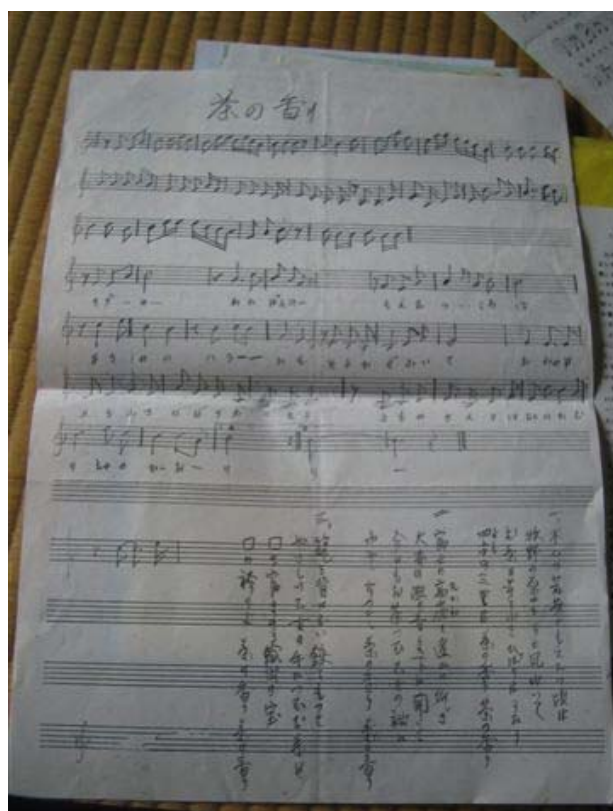
当時、大井牧ノ原海軍航空基地に若い航空兵達がいる、激しい訓練の合間の日曜にはリラックスして1日を過ごすことが出来るよう、付近の各家庭が受け入れていた。落合家の近所にある牛渕[現・菊川市]の近江家に滞在の折り、兵隊たちが茶所である当地の茶摘唄を余興に所望された。近江家の人たちが捜したところ、茶摘唄の詩を見つけることができたがそれに対応するメロディーの記録は見つからなかった。

折りよく、ひとりの航空兵・額賀辰雄氏の兄・額賀松吉氏が作曲家であることがわかった。そこで辰雄氏は、近江甲子氏に依頼して、見つけた茶摘唄の詩に4番の歌詞を創ってもらってつけ、松吉氏のもとへ送って作曲してもらった。大変立派な曲が出来上がってきたので、その曲を兵隊さん達が演奏し、父・落合勝郎氏の勤務先・六郷小学校ではこの曲のために毎年音楽会が催されたほど、一時はかなり盛大にうたわれていた。(別途、この曲は終戦直後の昭和21年4月29日《茶摘み小唄》として朝日新聞社女性合唱団・プロの吹奏楽団の演奏でNHK全国放送の電波にのった。)

その後戦争が激しくなり歌どころでは無くなって戦後も歌は廃れてしまった。残念に思った落合勝郎氏は、以上の《茶摘み小唄》の経緯詳細を『郷土新聞』(平成12[2000]年3月3日)紙に投稿した(写真Ⅱ-3)。また、勝郎氏はメロディーの記憶を辿って五線譜化し、《茶の香り》と称した(写真Ⅱ-4)。そして、投稿記事を見て連絡してくれた山田成治氏に編曲し直してもらい、その年(2000年)の5月には正式な歌となった。踊りの振り付けもして、2000年11月には地元の文化会館で、翌年には牧ノ原小学校、海外の一部でも日本の茶摘み歌として披露された。また、地元の小笠高校(菊川市)にはブラスバンドへの編曲も要請してあるが、まだ実現はしていない。

郷土新聞 2000 年 (平成 12 年) 3 月 3 日 (金) 掲載記事

写真Ⅱ-3 落合勝郎氏による投稿記事 (2005-8-19 撮影：大槻寛)



写真Ⅱ-4 落合勝郎氏による《茶の香り》(2005-8-19 撮影：大槻寛)

Ⅲ. 実践活動

Ⅲ. 実践活動

1. 懇話会

2004 年 12 月 11 日 於：静岡大学

招聘者 中村羊一郎（静岡産業大学教授 民俗学）

高崎譲寧 （民謡研究家、元沼津市音楽教員）

葉桐清一郎（株式会社葉桐取締役社長）

山田正訓（静岡県教育委員会文化課）

吉田理世（宮城社大師範・生涯学習音楽指導員）

吉田道美（箏・三絃・胡弓教室講師、浜松市立高等学校箏曲部指導員）

これは、研究当初計画に従って県内外の歴史文化、学校教育、民謡研究家、邦楽演奏家、茶業の各専門分野 6 名の方々を招聘し、本プロジェクトによる平成 16[2004]年度前半までに実施した聞き取り調査や研究実践について報告し、今後の研究の展開について議論したものである（カラー写真 41）。プロジェクトメンバーの役割分担としては、小西が司会および研究実践等の報告、大槻が過去の民謡素材から抽出して作り出した 8 小節のモチーフ、およびそれをピアノ曲として試行的に展開した《茶歌ヴァリエ I》の作品発表、柳沢はそれにふさわしい表現技法を開発し、ピアノ演奏として発表した。

茶業の葉桐清一郎氏からは、最高級煎茶を振る舞って戴いた（カラー写真 38）。茶関連イベントにおける奏演を意識しての茶歌再創造は、音や音楽の技術的な側面のみならず、コンテクストとしての茶文化のなかでの位置づけを常に意識しておく必要がある。その際、本来は茶を入れるという行為、それによって引き出される香りや実際に味わうことで身体的にも理解することを欠いてはならないはずである。葉桐氏は、その重要性について行為を通して示した。

茶文化研究の立場から中村氏は、生産労働に関わる本来の茶節から町田嘉章作曲「ちゃつきり節」が新たな民謡の発展という観点でターニング・ポイントになったのではないかと思える。今回の再創造作業を進める上で民謡の再創造或いは再生が出来るのだろうかという疑問を問われ、改めて民謡がどのようなものかはっきりさせるべきであるというご提案を受けた。またこれまで県内の民謡収集にあたってきた高崎氏は、昔の民謡を調べれば調べるほどつくづく労働の美しさを歌で表していたものと思えるので、その点を充分勘案して再創造にあたるべきものとする。子供達に労働を見せるという観点も忘れてはならない。茶節には合いの手が一般的に入ることも考慮してほしい。

邦楽演奏家・学校での指導者の立場から、吉田理世、道美は民謡と言っても伝統音楽、日本音楽…など色々な分野のものがあるので、あまり民謡の定義や言葉にとらわれない方が良いかも知れない。お茶に対するイメージは年代によってもかなり異なるという点も踏まえるべきではないか。このプロジェクトは大変画期的なものに思えるので大いに期待し、

協力したいというご意見をいただいた。そして学校教育現場からの声として、山田氏は子供達の現状から思うに、民謡再生を学校現場で実現するにはテンポが重要な鍵になると思う。子供のリズム感を充分意識した作業が必要であるというご指摘を受けた。以上の各氏からの貴重な意見や提案をもとに、平成 17「」2005] 年度シンポジウム開催に向けての検討をすすめた。

2. シンポジウム「静岡の茶歌再創造と現代的奏演—市民参加型をめざして—」

2005 年 7 月 2 日 第 3 回日本音楽表現学会シンポジウム 於：静岡市グランシップ

日本音楽表現学会大会アクアブルー大会にてシンポジウムを開催し、昨年度の懇話会における討論をふまえて大槻が改作したピアノ作品《茶歌ヴァリエⅡ》を柳沢が演奏し、パネリストおよび会場参加者から広く意見を求めた（カラー写真 42、43）。パネリストは、中村羊一郎（民俗学）、須山由利子（静岡県教育委員会文化課）、吉田道美（箏・三絃・胡弓教室講師）である。これまでのプロジェクト協力者をご招待し、また知人や卒業生にも積極的に広報活動を行った結果、学会員はもちろんのこと、予想をはるかに超えた会場を埋め尽くす市民が参加してくれた。

90 分という限られた時間のなかで、プロジェクト概要説明、作品披露、パネリストからのコメント、会場参加者を交えての討論を組み込まねばならなかったため、その時間内に十分な意見をいただけないことも予想された。そこで、あらかじめアンケート用紙を配布し、自由記述のかたちで会場参加者に本プロジェクトに対する意見や提案を求めた。その結果、今回の試みに対する参加者の関心や期待の高さが明らかになり、また協力者として名乗り出てくれる方々もいらっしやった。以下にシンポジウムの記録を掲載する。

小西 それでは、シンポジウム「静岡の茶歌再創造と現代的奏演—市民参加型をめざして—」を開催させていただきます。まず、本プロジェクト設立の目的を説明させていただきます。私たち 3 人は、民謡の発掘の必要性和可能性について非常に強く考えました。地域にはたくさんの民謡がございます。しかしながらそれが埋もれてしまうのは非常に残念である、こういう地域の財産をぜひとも掘り起こしていく、そのことによって地域に再び広がっていく可能性があるのではないかとこのことを考えました。また、ここでの大きなテーマである民謡再創造—つまり再び作っていくことに対する社会的ニーズもあると考えました。つまり、古い民謡を掘り起こしてそれを保存しておくということを超え、さらに新しい創造をすることによって社会のニーズあるいは地域の求めることに答えていけるのではないかと、またそれを通じて地域の活性化につながるのではないかと考えました。現代的奏演の開発と地域への還元、奏演という言葉はなかなか耳慣れない言葉かもしれませんが。ここでいう奏演とは、カタカナではよく「パフォーマンス」と呼ばれているものをさします。演奏という言葉ですと、楽器を演奏するということに楽器に特化した狭い表現になりますけれども、パフォーマンスといった場合より広い意味での表現になるのではないかと思います。

した。つまり民謡を再創造するときに、演奏を超えた様々な身体の実現みたいなこともゆくゆくは考えていきたいというわけです。そして、演奏を通じて地域に還元していくことが地域文化の創造につながり、学校教育の中にも還元してゆけないだろうかと考えたのです。

その際、私たちは「民謡」というものについて次のような考え方でとらえました。民謡は、節、言葉、体、身体性という3つの要素から成り立った広い概念のものであると。それを狭くとらえた場合には、1つの民謡、すなわち固定したひとつのパターンとなって教科書的に掲載されていくようなものになると。しかしながら固定されたものになったとしても、それが隣の人に口伝えられ、あるいは地域の中で伝承されていくうちに、次第に少しずつ歌詞が変わったり節回しが変わったりしていろいろなヴァリエーションが生まれてくる。そのことによって、その1つの民謡自体の概念が拡大していく。さらに、それがラジオなどで放送されたり、CDなどにレコーディングされることによって地域を越えて伝播したとき、他の地域に伝えられていく。それに伴い、その民謡の概念はさらに拡大していくものだ。こうやって拡大・拡散したものを含めて、民謡としてとらえたほうが良いのではないかと考えました。

ここでまずご紹介いたしますのは、もともと作業歌であった茶歌です。これが大正15[1925]年、東京のNHKまで行った静岡の茶歌の名人の方々によってラジオ番組で放送され、さらにそれを録音した記録です。出演された方々の記念写真も、今でも残っております。このように録音スタジオで録音された記録や、「当時ラジオで放送したものが録音機で吹き込まれた」という茶業会の記事も残っております。大正末期から昭和の初めにかけては、すでに各地の民謡が忘れかけられつつあったのですが、地域の中でもだんだんいろいろな方が民謡のあり方に興味を持ち始め、「地域の中から古い民謡を再収集しようじゃないか」、あるいは「資料を集めようじゃないか」というような動きが出てきました。

次に、時代は下って1980年代から90年にかけては、地域のいろいろな方が先ほどの資料でありますとか、茶節に関する文献というものが見つかったという記事が掲載されるなどの動きも見られるようになりました。つまり、地域の中で地域の財産を再発見するというような動きが次第に盛んになってきたのです。もちろん、このほかにも1986年県教育委員会で編集の『民謡緊急報告書 静岡県の民謡』ですとか、そこから一部を抜粋しまして楽譜化された『静岡県こころのうた』、あるいは、お茶の里博物館のほうで出版されました森蘭さんの『お茶の唄々』、それから佐藤さんの『ふるさとのうた』など、地域の中からも次第に何か残していこうという動きになってきた。このように地域の中から芽生えている一方で、同時に全国的に何か民謡をつくっていこうという動きもあります。例えば有名な話ですと、実は《ちゃつきり節》は北原白秋作詞・町田嘉章作曲の作品であり、東京の有名な音楽家・作詞家の方にキャンペーンのために書いてもらったものであること、あるいは最近ですと《渋茶でチャチャチャ》やNHKみんなのうたでデュック・エイセスが歌っていたという《今日も茶ッピーエンド》などの作品例があげられます。後者2つは、茶業組合とか関連の業界さんのほうで「♪さかなさかなさかな〜♪」に続くキャンペーン用の歌という流れの中で出てきたところがございます。ゴロ合わせ的なものであったり、商業的な目的で初めから「作ろう」、新しいリズムを組み合わせで何か作っていこうというものだともいえます。

その動きそのものはとてもいいことだと思うんですけども、ただ地域の素材をなにも使っていないなかったりですか、せっかく地域で人々が民謡に関して関心を持っているのにその関心の目と
いうのがまったく生かされないで、東京で作られたものが静岡に持ち込まれてそれで静岡の歌に
しようというような流れですと、非常にさびしい思いもあります。同じお茶でも、いろんな味わ
いがあります。静岡の人は静岡のお茶、静岡の中でも金谷のお茶、というふうですね、いろい
ろ地域のヴァリエーションがございます。そういうものがまったく加味されないというのは非常
に残念だということもあります。

そういったことから私たちは方針としては、まずは分散した資料収集、それを整理しようとい
うことから始まりまして、そこから保存するだけではなく、新しく創造していく、再創造していく
ことに発想転換してみよう、そしてたくさんの民謡の歌詞集があるんですけどもそれで CD な
んかもセットになって販売されているもの、あるいは楽譜化されているものもあるんですけど、
私たちとしては紙のメディアだけではなく、耳に届く形でアウトプットしていきたいということ、
それから、商業ベースではなくて市民参加型ということを決めました。先ほどアンケート用紙を
お配りさせていただいたのは、皆さんから多くのご意見をお伺いしながら、今後の民謡を作っ
ていくときにどういう考えがあるだろうか、あるいはこういう民謡の作り方があってほしいとい
うようなご要望を私たちが聞きながら作っていくという「市民参加型の創造」についてもご提案し
たいということなのです。そのことによって、こういう民謡がほしいという社会的ニーズに答
えていけるような民謡が出来るのではないか、その際、地域での実践例調査もしていこう、と方針
を立てました。

実際の再創造ですけども、まず過去の素材の整理と聞き取り調査をしてまいりまして、今まで
集められた資料、重要な資料、音源資料だけではなくて文献資料も含めて、それから聞き取り調
査を行っていく、それから 2 番目に「エッセンスの抽出を行いました。民謡の再創造に難しい問
題がございまして、ある地域の 1 つの民謡を代表させて再創造してしまうと、どうしてそれがひ
とつの代表になったのかという問題がございます。同じようなお茶の民謡でも、地域によってす
ごく違ったりするわけです。みんなで協力してひとつのモデルを作るときに、これはあそこのも
のだというふうに一定の出所が特定されてしまうようでは、地域全体を代表するものにはなりえ
ないと思ったのです。そこで、私たちのほうからエッセンスを抽出して「モチーフ」として提示し
ていく、という方向で考えました。

私どもが今まで取り組んできましたのは[プロジェクターで映し出した資料の]1 から 3 までの項目
なのですが、今日以後やっていきたいことは、特にモチーフの発展、4 番目の項目と 5 番目、奏
演の可能性を追求すること、ここにはもちろん市民の声を反映させていくということです。図の
ほうにしますとこのような形になっています。モチーフが中心にあります。こちらは私どものエ
ッセンスからとりあえず提案をいたします。そこから皆さん方、たくさんの方が参加していくこ
とによってたくさんのヴァリエーションが生まれてくると思います。そのヴァリエーションがま
たモチーフにも反映されてくると、こういったものよりこういったものの方がよいのではないか、
というような双方向的な動きになっていって、さらにヴァリエーションから様々な方面で応用され

ていく、例えば、先ほど申し上げたみたいな茶業の販売というシーンでもよろしいかもしれませんし、学校での教育という現場も考えられます。このような形でモチーフというものをとりあえずこちらから提示したいというところです。

今回、作曲の大槻寛がこのような形でエッセンスとして抽出した「モチーフ」を提示いたします。その上で、「茶飲音楽」といいますか、先ほどのモチーフからヴァリエーションを作ってお茶を飲むときの音楽に仕上げることを考えてみました。実は、お茶を飲むときの音楽には先行事例があります。台湾では飲茶文化といいますか、お茶を飲みながらの文化があります。これは、近年になって非常に盛んになってきました。お茶を飲むときに何かいい音楽がないのは、お茶はもともと静かな空間で飲まれるものであったからです。そこに音楽というとそぐわないような気もするんですけども、新しい形でのお茶を飲む文化というのもあってもいいのではないかと、たとえば台湾なんかでは、お茶を飲む空間に道具や仕掛けがほどこされていて、そこに音楽が流されています。例えばこれは《聞壺》と書いてあるんでしょうけど、茶器にまつわる音楽、いろんな茶器があってその茶器ごとの音楽が作られていたり、あるいはいろいろな地方の茶歌を集めたもの、これも単純に集めてきたものを再収録したのではなくて、作曲家が新しく作り直してるものです。私どもも実際に台湾で資料収集しようと思ったんですけど全部買えないぐらいたくさんの CD がありまして、ほとんどそれを専門に作っているような作曲家もいるような状態でございます。このようなことから、今日は今からモチーフを提示させていただいた後ヴァリエーションの演奏をし、そして皆様方からのご意見をいろいろ聞きたいというふうなことで話を進めさせていただきます。

それでは、まずは柳沢が《茶歌ヴァリエ I》をご披露させていただきます。これは、昨年 12 月に開催した懇話会というのを開催いたしました。そのときに披露したものと同じ《茶歌ヴァリエ I》なのですけれども、今回はその懇話会での参加者からのご意見を受けて編曲しなおした《茶歌ヴァリエ II》もご用意してあります。ではまず、《茶歌ヴァリエ I》からお聴きください。

(柳沢：《茶歌ヴァリエ I》演奏)

小西 では、この《茶歌ヴァリエ I》に至る前のモチーフを音に出してお聴きいただきたいと思います。

(柳沢：モチーフ演奏)

小西 作曲の大槻が静岡県内の茶に関する民謡からいろいろなエッセンスを抽出して、このモチーフをイメージし、先ほどの《茶歌ヴァリエ I》として試行的に創作しました。そして、懇話会で様々な方々からご意見を聞きながら、今回はまた新しいヴァージョンとして作り直しました。それに先立ちまして、大槻からこの経緯について一言説明させていただきます。」

大概 皆さんこんにちは。作曲を担当しました大概です。今、小西先生の提示された計画全体図のほうから、理論的な面はお分かりいただいたと思います。私もそういう流れを受けながら、どういうふうに曲を作るかということが私の課題となりました。この計画以前は、私の中では民謡研究の柱として特別にお茶ということには絞らなかったのです。今回静岡ならではの特徴といえる本当の民謡、もちろん静岡には田植え歌から遊び歌まで何でもありますが、本当に静岡的というのはやはり一大特徴のある茶の産地ですね。私の印象ではこの地に三十何年住んでいますけれど、まあ茶畑っていうのは何かこう…美しい庭園っていいですかね、箱庭のようにも見えますし、朝もやの立ちこめる茶畑の香りとこの何とも言えない美しさ。これは九州から寝台列車で静岡への帰路で何度も感じたことですが、なんかすごく静岡が近づいていることを、そういう風景が1番肌と脳裏に醸し出してくれます。それとやはり、お茶がとりわけおいしいと思うのは「水」、本大会の名称となっているアクアブルーのアクアっていうのは、ご存知だと思いますけれど水のことですね。お水が静岡は、お国自慢になりますが、大変おいしいところですね。水のまずいところから帰って来ると本当にありがたいことだと思いますね。まあ生命の源ですからね。で、余計そのお茶の香りと味が一段と良くなると感じます。まあ私どもは当たり前のように、その素晴らしさを享受していますけれど、地形的にも源泉的な部分で非常に恵まれている。そういった自然に恵まれたイメージを理論的なことはともかく、私も町田嘉章作のちゃつきり節をテレビ・コマーシャル用に室内楽へ編曲したり、法多山尊永寺に伝わる田遊び祭などの調査研究をしてきたのですが、ちょっと立場を変えて今回テーマの計画の下に、もっと深い素朴なもので何かプレゼンテーションしていく側になりたいというふうに思っ、今言ったような印象というものを基に作曲をいたしました。まず研究の手始めとして昨年12月懇話会を開き《茶歌ヴァリエI》を発表いたしました。これはお茶の専門家や民謡採集の専門家、民俗学の専門家、邦楽器指導者、学校教育関係者の方々に内輪で試作曲を聴いていただく機会を得るために企画しました。実はそこでこの曲へのいろんな意見が出ました。「大概さんの作ったその一つの提案曲というのは茶歌の一番肝心なものが抜けている」と指摘を受けました。メロディーに必ずその茶揉み歌なんかは合いの手が入ると、お囃子とも言われますが…歌っている本人と、ちょっと手伝っている人がこうやると。で、今日この場に大正時代、歌をNHKまで静岡の代表として行かれた加瀬沢品吉さんの子孫がおいでになっていますが、そういった方への聞き取り調査をした時のことをハッと思い出しまして、やはり茶節を歌うときには必ず合いの手が入っていたと。それからこれも聞き取り調査での貴重なご意見だったのですが、琵琶とか尺八とか邦楽の伴奏で歌っていたらしいということ。音の素材としては分からなかったのですが、私の聴いた大正時代のレコードを録音したカセットテープ音にはまだそういうものは見えなかったんですけれども。そういった聞き取り調査からも懇話会のご意見からも、合いの手を入れるということが1つ大きな改作でした。もう1つ邦楽演奏家や学校教育関係者の方からは、「日本の音楽」を子供たちに今現在教えている立場からいうと、伝統に忠実に則した伝統だけを、スタイルを保持していくという方法は、なかなか受け入れられにくい。やはり元気のあるリズムとか、軽快な動き、身体の動きが自然に出てくるようなもの、そういったものをぜひ加味したほうがいいんじゃないかというご提案がありました。私の中

ではそういったこともありまして、いろんな意見やご提案を加味しながら、これからお聞きいただく《茶歌ヴァリエⅡ》へたどり着きました。あんまり大きくは変えられなかったんですけども……。台湾における飲茶店での BGM 音楽の用いられ方を思い浮かべますと、日本でのお茶の文化と言うものは中国、台湾、韓国にもつながっているというようなことも感じながら改作してみました。今回の改作が、今日の皆様のご意見を戴くことにより、又更に他でのプレゼンテーションを今後行うことを繰り返しながら、楽器を変え、邦楽器への改変や、歌詩をつけたりしていきつつ息の長い多様な発展に役立てればというように念じまして作曲いたしました。以上です。

小西 ということで、何かお茶を飲むときのために雰囲気がある曲がいいかなあとということで、編曲といますかヴァリエーションを作ってみましたわけです。その際、懇話会の意見を取り上げて、さらに合いの手の部分のようなものを付け加えたものというのが、今からご披露させていただきます《茶歌ヴァリエⅡ》（五線譜化したものを p108～114 に掲載）です。では、よろしくお願いします。

柳沢：《茶歌ヴァリエⅡ》

小西 それでは演奏する立場から、柳沢から2曲について色々工夫した点とか違ったところとか感じたところをお話させていただきます。

柳沢 どうも、柳沢です。大槻先生のほうからこの曲をいただきまして、まず、一番課題になったことは音と音の間をどのように作っていったらいいだろうか、ということでした。ヴァリエ1のほうは特にそうだったのですが、割合歌いやすいメロディーではあるんですが、民謡ということからヒントを得るということもあるものですからいろいろな音が錯綜してきました。というのは去年からお茶の調査をしてきた中で、例えば知人のおります所に牧の原という所があるんですが、日本の歴史というようなことも一緒に背負っていることがわかってきます。江戸幕府が終わりまして、そこの侍たちがですね、江戸から静岡に来まして徳川慶喜が連れて来たといことなんですけども、そこで牧の原大地に茶畑を開いていった。その時に、勝海舟だとか、清水の次郎長だとか、そういう人たちが非常に関与して、そういうことの手伝いをしたり、関わってきたという、まあそういうような、お茶を1つ調べてみましても色々な歴史がそこにあるんだということが見えてくるわけなんです。そのような事柄のイメージを基にいかにかに音にしていけたらいいだろうかということが一番の課題でした。まあ、西洋音楽のことをやってきた私にとりましては、先ほどのギニアールさんはスイス人ですけども、ショパンの研究をなさって、それで今、琵琶をされてるわけなんですけれども私は日本人で西洋音楽をやってきて、今度は日本のものを、というわけです。ウィーンのほうにいましたけれども帰ってきて以来、日本の音楽とは何かということに直面してまいりまして、常にそのことが課題だったわけなんです。それで現在、交通も早くなり通信手段も早くなってヨーロッパ、アメリカの様子も手に取るように分かる。そういう

中において人の感情っていうんですか、感性というものがどういうふうの世界の中でバランスをとっていかとか、その中でいったい音楽とは何かとか、民俗音楽は何かとか、いろんなものが錯綜する中でですね、最終的には自分がどういう音を求めているかとか、そこにある音はいったい何なんだろうと、そこら辺が課題だと思うようになりました。今日はピアノで演奏させていただきましたけれども、これが邦楽器、つまり色々な日本の楽器に変えてみたらどうだろうかとか、そのようなことを想像しながら演奏に努めてきたつもりです。一番の問題は最初のレ、ファ、ソ、これをどういうふうにもっていくか。これをクレッシェンドしてしまいますと、やってみたんですが、非常に詰まった感じになってしまいまして、後が続かない感じになってしまいます。このフレーズは茶の香りとか茶畑の春先ですね、春先の新芽が出た頃はまだ霜が降りる時期ですから放っておくと焼けてしまうんですね、ですから昔は焚き火をしたり、タイヤを燃やしたりして霜が降りてきたら、暖めて凍らないように工夫したわけです。現在では防霜ファンを設置しています。新幹線からご覧になった方もいらっしゃると思いますが、茶畑の中にプラペラがいくつか設置されていて、あれを回すことによって、下のほうの空気を動かすことで霜がつかないように工夫されているわけです。ちょっと話が逸れましたが、そのような朝もやの中の風景だとか、それからお茶の一服するときのくつろいだ感じだとかお茶の香りだとか、そういうものが音で表せればと思いながら演奏してみました。

小西 それではただいまよりパネリストの皆様をご紹介します。中村羊一郎さん、須山由利子さん、吉田道美さんです。実は中村羊一郎さんには前回の懇話会にも参加していただきまして、貴重なご意見もいただきました。この3名とも、《茶歌ヴァリエⅡ》を初めて今日聴いていただきましたので、率直な感想でありますとか、まあ専門のお立場からまた感じられたこと、コメント等をよろしくお願いいたします。」

中村 中村でございます。前回聴かせていただきまして、今回も聴かせていただいたんですけれども、率直に申しまして、私は音楽の専門化ではございませんし、曲のモチーフがどうこうというふうなことでコメントすることはちょっとできません。ご説明にもありましたように茶畑のイメージであるとか、お茶を飲むイメージというふうなものが下敷きとなって、かつ今まで調査された、民謡のエッセンスを、曲の中に盛り込まれたということでございます。私は今回のこうした試みに対しまして非常な期待をもっている一方、自分の専門の分野立場から考えますと、いくつかの疑問点のようなものも感じざるを得ないところがあります。私なりに疑問点のようなものもお話をさせていただきたいと思います。例えば先ほどパワーポイントで示して下さった、核になる3つの円があります。節と言葉と身体性とございましたけれども、節と言葉というのは非常に分かりやすいんですが、身体性というのは具体的にどんな概念でしょうか。」

小西 お茶をうたう時に、先ほど写真のところがありましたように、マイクに向かう場合はマイクに向かって歌うようになるのですが、実際に労働をしながら歌うとなると、その労働に伴う様々な動

きというのが自然に入ってくる、そういった意味での身体性という意味です。

中村 いわゆる民謡の本質的な部分ですね、まさにこの作業をいかに効率よく、かつ飽きずにやること
ができるかというところにあったと思います。そういう意味で茶歌、あるいは茶摘み歌、こ
れは茶歌は分解すればお茶を摘むときの歌、つまり茶摘み歌。お茶を揉むときの茶揉み歌。出来
上がったお茶を選別する茶より歌など色々あるんですけども、労働作業というものと非常に密
着した形で民謡というものが存在してきたんだろうと思います。そういう意味で、こうした新し
いイメージで創作をしていく歌というものが、本来民謡というものが本質的にもっていた、ま
さにその作業労働に付随したものであったという部分をどのような形で継承していくことが
できるかというのが非常に難しいポイントじゃないかという気がいたします。ですから簡単に
ですね、そのイメージを受け取って作曲されたということではすまされない、より民謡とし
ての本質につながったものというものをどう表現されるかということこれから私としては
非常に期待したいと思います。そして、先ほどちょっとご紹介がありました《ちゃつきり節》
なんですけれども、ご存知のように昭和2年に北原白秋が静岡電鉄、現在の静岡鉄道のPR
ソングとして作詞を依頼されまして町田佳声が作曲をしたわけでありまして。私は初め
て《ちゃつきり節》を分析してみたときにですね、何だか知らないけれども日本中の茶摘
み歌のいいところを、つまりいいところ取りをしてですね、白秋先生なんせ何千曲も
作ってるわけですから、まあいい加減に作ったんじゃないかなと思ってたんですね。
ところが、その背景を色々調べてまいりますと、やっぱりあの「ちゃつきり、ちゃつきり」
という囃し言葉にですね、実は大変な意味があるということに気がついたのでしたん
です。それはどういうことかと言いますと、今まで茶畑でお茶を摘んでいたのは手摘み
だったんですね。それが明治末から大正初年にかけて日本の近代工業の発展に伴って、
女性の賃労働が拡大し、賃金が非常に高騰してまいります。そうすると、ほとんど
ただ同然で使っていた若い女の子たちが使えなくなりまして、品質は若干落ちて
もハサミを使ってお茶の葉っぱを刈ることが要求されてくるんです。実はこの茶バ
サミというのは明治の中ごろにすでに発明はされていたんですけども普及しなかつ
たのは女性の賃金が非常に安かったからです。しかし大正の末から昭和にかけま
して、ハサミが急速に普及していくという問題は、やはり日本の社会構造とそれ
に伴う労働形態のありようという問題が大きく絡んできている。北原白秋自身は自
分の故郷、柳川のすぐ近くに八女という古くからのお茶の産地がありまして、そ
こでたくさんの民謡を彼は耳にしているわけです。ですから、白秋は柳川あたりの
民謡を言葉の上ではヒントにしながらですね、ちょうどこの近くの日本平という
ところで白秋は取材をしたんですけども、おそらく山間地域の八女ではまだ普及
してなかったハサミを、ここで初めて見たんじゃないかと私は推定しております。
そうしますと白秋が、お茶を摘むときの手摘みの作業にかかわる「ちゃつきり、
ちゃつきり」というこのハサミの音を耳にしてそれを歌に取り込んだということは、
実はすごい感性だったんじゃないかと私は考えます。そしてこれを、茶業展開の
歴史の中に位置づけるとまさに先ほど申しましたような社会構造の変化、それ
から労働の内容の変質に伴った時代の変革がこの言葉に表されているわけですから、
《ちゃつきり節》というのは新しく創造された民謡でありなが

らも実はそこに非常に深いものがある。静岡県の茶業界の現状というものを、「ちゃつきり、ちゃつきり」というその音の中に見事に歌い込めたというふうに考えています。それからもう1つは作中の町田嘉章がこれをお座敷の歌として作曲したとこのように語っております。ということは、汗にまみれた労働としての民謡が、きれいなお座敷の歌に変質していく時代にも当たっていたわけでありますから、そういう意味では《ちゃつきり節》というのはまさに時代を切り取った歌ということになるわけです。今、グループの皆さんでやってらっしゃるこの新しい民謡の再創造という問題も、やはりどこかでそうした時代性なりあるいは社会性なりというものを反映した形で作っていただきたい。それが広く普及していくことによって、平成の十何年かにこの歌ができた。それは実はこうした社会というものを背景として、まさに民謡として発展していく可能性があるなら、というふうな評価を与えられるのではないかとこのように私は考えます。ですから、是非ですね、そうした意味での新体制や地域性、さらには民謡の本質を踏まえた方向というものを模索していただければ、素晴らしい発表になるんじゃないかというふうに思います。」

小西 ありがとうございます。時代性というところでいかがでしょうか。大槻さん、一言お願いします。

大槻 はい。中村先生には懇話会と2度目のご出演で、忌憚のないご意見は本当にありがたいことだと思います。やはりお互いに、いいよ、いいよと言っているだけでは全然意味のないことです。確かに《ちゃつきり節》の件も、私も、茶刈機、茶バサミが普及したということと関係があったということ調べて、まあそういった時代といったことも考えると、中村先生の論でいきますと元来のお茶畑の状態ですよね、それとお茶の味わい方という点、お茶の労働産業の形態、茶刈り器、茶バサミが入った時代から現在は一段も二段も進んでいて、変わらない部分というのはお茶の何と言うんでしょうか、茶畑の雰囲気はあまりかわっていないということですが、茶摘みの娘さんは全くいませんし、機械化されていますし、現代に生きる子供にとって、今を生きる私たちにとってのお茶の利用となると、どの辺になるかなというのは問題になりますね。まあそういう意味では北原白秋さんも、その時代の相当いろんなものに直接対面して詩作をねられたのだろうということは思いますし、今の私たちはそこをどう直面していくかをテーマにしなければいけないということだと思いますね。

小西 現代ということから考えますと、やはり現代の教育問題あるいは文化の進行ということで、その現場にいらっしゃる須山百合子さん、何か色々な問題の意識をもっていらっしゃると思います。一言よろしく願いいたします。

須山 静岡県教育委員会文化課で芸術文化振興を担当しております須山と申します。今日は初めてこの音楽を聴かせていただきまして、何を私のような立場から申し上げていいものか最初から分からなくて困っていたのですが、静岡ならではのお茶というものを使っ

とで、現代的ニーズに応える、保存ではなくて活用すること、という所で、どういう場面、どういう場でニーズというものが生まれるのかなあということを私自身すごく疑問に思いながら、今日は参加させていただきました。今、県の教育委員会文化課という所におりますが、元は高校で国語を教えております教員でございます。それで高校などの教育現場の中で、例えばどういう場面が考えられるのかなというようなことを考えていたのですが、例えば県内でも、先ほどお話に出ました牧の原の近くにございます榛原高校などでは学校独自の茶摘み歌みたいなものが、かつてそこにいらっしゃった先生によって作られて勤労体験みたいな茶摘みのときに歌われたということも聞いております。けれども、労働歌としての歌というものはなかなか今の教育の場面では生かしきれないものがあるかなというふうに考えていたのですが、今のヴァリエⅠとⅡを聴かせていただいて、特にⅠのほうはどちらかという労働歌としての要素みたいなものはあるかなと感じたのですが、ヴァリエⅡのほうは労働歌ではないのではないかなと素人の感想なのですが思いました。ではどういうものが現代的ニーズとして考えられるかなあというふうに考えておりますときに、先ほど見せていただきました台湾の飲茶の文化ですか、まさに今、日本でも緑茶というものがペットボトルでとても売れ行きがいいですね。でも本当のお茶の文化というものはペットボトルではないと思うのですが、ペットボトルのお茶の宣伝にも、本当に日本的な懐かしさと呼び起こすような、そういうコマーシャルが使われていると思うのですが、何か現代的なニーズと言ったときに、今のヴァリエⅡを聴かせていただいてすごく、こう癒されるというか、本当にこうお茶を飲むことでほっとする、日本人の懐かしい心の琴線に触れるような音楽だなあという気がいたします。私は静岡で生まれ静岡で育ちましたのでちょっと他県の方には失礼かもしれませんが、旅行などに行ったときに他の県で飲むお茶というのはちょっとやっぱり寂しいなという気がするものがあって、やはり静岡にお越しいただいた皆さんが、本当においしい静岡のお茶というものを飲みになってお帰りいただけたらいいなというふうに考えているのですが、残念ながら静岡の街中で喫茶店とかに入っても日本茶が飲める喫茶店がありませんね。お茶の老舗、まあ唯一ホテルの中に静岡の有名な喫茶店を出しており、本当に一煎目、二煎目、三煎目というそれぞれの味わいがある日本茶には日本茶に合ったお菓子がついてきます。ですから、そういう日本茶を飲んで、そのときに今のヴァリエⅡのような現代人の心を癒してくれるような音楽がかかるという、本当に生活の文化を楽しむようなお茶の新しい文化が静岡から発信できたら素晴らしいのではないかなというふうに感じました。

小西 ありがとうございました。ニーズについて私どもも皆さんから多くのご意見をいただきながら、こんなときにこんな音楽があったらいいんじゃないかということ色々出していただきますと、それなりに色々なヴァリエーションが生まれてくるのではないかな。あるいはこれだったらもっとこんなふうにしたほうがいいというふうな形で皆さんのほうにこの輪が広がっていくことで、新しいものが生まれる新しいモチーフが芽生えていく。それも大いに歓迎したいというふうに考えていて、まあ言ってみればひとつのきっかけ作りといいますかそういうことに役立てたらいいかなと考えております。それでは、最後になりましたが吉田道美さん学校でもお琴のほうを教え

ていらっしやる経験もあるということですのでよろしくお願いします。

吉田 母、姉と三人四脚で箏の演奏それから教授活動をしております。時々学校の先生に間違われるぐらいにいろんな市内の小、中学校に出入りして箏の授業を受けもっております。お箏といいますと大体皆さん敷居が高い、日本人なのに見たことも触ったこともないという方がほとんどというのが現状で、それで私どもも大変な危機感をもっておりましたし、学校の文部科学省のほうで日本の音楽の鑑賞だけでなく実際に体験しなくてはいけないという教育の方針が加わりまして、そんな現場のニーズ、先生方の熱意と私たちの危機感とが合い重なったという訳です。今、音楽を聴かせていただきまして、私は大体子供たち、中学生が主なのですが日本語も通じないような宇宙人のような子供たちにお箏を教えるには、まず理論や理屈からでは絶対受け付けてくれません。しかし、言葉は通じないのですが感性はやはり通じるものがありまして、初めて聴くお箏の音楽でも、先生これ懐かしい音色だねって言うってくれる子もいます。ただ、私たちが感じるその日本の音楽に対するイメージとは少し違って懐かしさとともに、新しい新鮮な魅力を感じているのではないかと思う節がございます。で、今、茶歌のヴァリエ聴かせていただきまして、やはり子供たちに幅広く長く受け継いでもらうには、シンプルな音階とリズム、これが複雑だとなかなか浸透しませんので、モチーフとしてやはりシンプルなものが、力強さと普遍性を大事にして、そこからいろんなアレンジをしていただくというほうがいいのではないかと私は思っております。で、飲茶ということで最初に大槻先生のイメージを伺って、もう私は本当に飲茶だなあって自分がくつろいでいる風景が浮かんだんですが、まず子供たちには飲茶の意味がわかりません。子供たちにはまず音楽とリズムで入っていけば受け入れてもらえるかなと思うんですが。先ほどから茶歌のもつ歴史的背景を伺いましたが大変興味の深いもので、これもやはり大事にしていかななくてはいけないと思います。音楽が広く伝わるにはひとつの世代ではなく、子ども、お父さん、お母さん、それからおじいちゃん、おばあちゃんといろんな世代に普遍的に伝わるものがあることが一番だと思いますので、その歴史的背景とか文化はいろんな世代の、年配の方は理論から入っていただくとか世代間でひとつの曲をいろんな立場から楽しめるのもいいのではないかと私は思いました。それから音楽を聴きながら私はこれをお箏で演奏したらどういう音階になるのかなとか、ここはこういう演奏方法かな、お三味線入れたらどうかなということをイメージしながら聞かせていただきました。子どもたちは曲を受け入れるときに、まずかつこいいと思うかどうか、この曲かつこいい、あるいは素敵、うっとり、もうそういう主観的なところから入っていきますので、ぜひこのゆったりとした中にリズムカルなところを入れたいととても受け入れやすいのではないかと思います。それともうひとつ、様々な楽器でのアレンジや色々な楽器での合奏ができたほうが楽しめるのではないかと、更には邦楽器と洋楽器のコラボレーション、これが本当に編曲が大変ということは私も良く分かっておりますけれども、これがこれからの日本の音楽を楽しめ、それから発展していくと思います。すると又逆に子どもたちは古典の渋いものの魅力に気がついてくれるようになります。ですから両輪といいますか、古いものを大事にその魅力を分かせてもらうためには新しいものも発展していくという両方のほうでぜひお願いしたいと思っております。

先ほど大槻先生に早くこの曲世に出してくださいとお願いしたんですが、こういう曲が浸透するのに本当に時間がかかります。で、現場の地道な活動、子どもたちが根をあげるぐらいにじっくり取り組まなくてはなりませんので、早く世に出していただいているいろんなところで耳にする。それから耳にするだけじゃなくて演奏できるという機会をぜひ与えていただきたいと思います。

小西 ありがとうございます。カッコいいと思わせるというのは、なかなか難しい問題でもありますよね。例えばもっと若い世代の作曲家—学生とかが追及するカッコよさを織り交ぜていったらどうなるんだろうかといったような、世代を超えたカッコよさを追及するための努力というのも今後考えられるかなと思いました。今日のはるばる遠くから来てくださった方々、音楽表現専門の方々、あるいは地元の方々と色々な方がフロアでお聞きになっています。ぜひとも今日の感想でもよろしいかと思いますし、それから今後こんなのがあったらいいというアイデアをこの場でぜひ出していただきたいと思いますがいかがでしょうか。」

鈴木 音楽表現学会会員で尺八奏者の鈴木昇畝と申します。3点ほど。けちをつけるわけではございませんので。最初にシルバン・ギニャールさんの講演の中で大変大切なことをおっしゃっていました。それは日本の音楽を演奏するときに、半音のとり方ですね。学校音楽でこの半音をどうとらえて下さってるかなというのが一番疑問です。ただピアノでやって音階がこうなるよって言う上で、これが日本音楽ですよって大体それで終わってしまっているんじゃないかと思っています。で、吉田さんも同じなんですけれども音楽では半音をどうやって狭くとるかということが音楽表現の一番の基準でございます。民謡を採集した場合でも、どうそれを表現するかというふうに、現代的に厳密というかピアノに合わせてバラバラって作ってしまうのか、それとも半音をもう少し工夫して、工夫しなくても三弦や琴や尺八や琵琶なんかはどうしても狭くやります。そこんどこをどういうふうに教育の場でどう表すかってことが僕、非常に大切じゃないかと思っています。それからもう1つ、前から聞いていたんですが《ちゃつきり節》のちゃつきりというのはハサミでやるからってということ、僕は昔からずっとおかしいと思ってたんですね。で、皆さんはお茶を摘んだことがありますか。一日中お茶を摘んでいますと右手、右ききの人は右手がねえ真っ黒くなって、肩が痛くなって腰が痛くなってもうどうしようもない。けれども一日中続けますよね。これはやっぱり歌が入って元気付ければね、やっぱり長続きする。家を建てるときにね、柱立てたら柱石を乗せるところ、やりますね。やっぱりエンヤコーラって歌ってやりましたものね、子どもの時分はね。あれ歌を歌わないと馬鹿らしくてやってられないんですね、あれ。お茶摘みもそうだと思うんです。お茶を摘みますとね、やっぱりお茶を積むときには今の人たちは手摘みっていうのをやったことがないと思うんですが、立って摘んでいたりしていた、これ嘘なんです。しっかり座って、地面に座って左手で葉っぱを、枝をもって、それで右手でそれをひとつずつ採る。やっぱり、バシッ、バシッって音がします。で、お茶をハサミで刈るって言うのはね、昭和40年代に入ってやっとでてきたんですよ。で、一番茶ってのはハサミで摘んでいませんでした。まあ、やっとな番茶を摘むか、まあ大体番茶を摘んでいました。二番茶終わる前にね、一番と二

番の間に遅れて色々出てきますんで、それを刈っちゃうときに袋つきのハサミで刈りました。で、これはですね、俵へ摘みます。ですから駅弁、駅なんかで静岡と浜松の駅で売っているお茶というのはそういうお茶だと思います。安いですね。そのときはハサミでやっていたんですね。それからお茶の葉並びをそろえる技術が出て、これ難しいですが、それができてからやはりハサミでやるっていうようにだんだんなってきました。手バサミですね。で、手ハサミで使ったことある方があると思いますが、バシ、バシ摘んでいるようなお茶じゃあね、どこを刈っているかと思うんですね。お茶の葉っぱをハサミで刈るときはね、それこそ丁寧にザクッ、ザクッっていうような音でやらないとね、木が入っちゃうんですね。木が入ったら値段ががたっと落ちてしまいますから。さっぱりあら茶で出すときには、それまで選別できません、あら茶って分かりますかね。製茶工場のところから出るときあら茶っていうんですね。そのときは木が入っちゃいます。だからこれはハサミでやったかどうかというのは絶対分かっちゃいます。でも、分からないようにやるには丁寧に、手で摘む以上に丁寧に音でないようにやるっていうのが実感です。やっぱり僕はそのハサミっていうのはねえ、茶つきり節のあれじゃないんじゃないかなっていうふうに、僕の見解ですがね。で、実際に作詞された方がこれはハサミで刈るからこうしたよっていう証拠があれば、もう仕方ありません、それはね。そんなことを考えました。それから日本語で飲む茶、飲茶って言っていますけれども、これは広東語ですね。「ウェントンフォアード」って言いますと、「ヤムチャ」になるんですかね。これは動詞で使う場合はお茶を飲むのですけども、名詞で、今日は名詞で使っているようで、名詞の場合、軽食のことを意味しますね。あの、香港へいったときに飲茶の店へ行きましょうっていったらね、僕はお茶でも飲ましてくれるのかなと思って行ったら軽食屋のところです。お酒は飲んじゃいけない。それで朝飯とか昼飯をそこで食べるのですけれどもそこで、それが飲茶。ただお茶を飲むことは、標準語「ウトオンウォアー」ですとね、「ヒューチュウアー」ってなりますけど。前に台湾の人と香港の人が話をしていたんですけども、沖縄へ行ったときのことで、あなたたちは中国人ではありませんかって言ったらそうですって言うわけね。なぜ日本語で話している、日本語で話しているんですね。台湾の人と香港の人が話しできないんですよ。で、台湾の人は広東語が喋れない。で、日本語なら話せるっていうので日本語で話している。面白い現象なのですが。台湾が出てきて飲茶が出てきていてね。まあ日本でも飲茶、飲茶って言っているから台湾でも言ってるのかなあって思ったのですがね。お茶っていうことに結び付けて厳密に考えたら使い方がちょっと危ないかな、っていうような感じがいたしたんですけども。その3点頭の中にひらめいたものですから申し上げました。以上でした。

小西 貴重なご意見ありがとうございました。用語についても、参考にしました文化の用語やそれぞれの地方による差も加味しながら、どういうふうにそれを用語としてというか言葉でも表現していくかということも、私たちが併せて考えていきたいと思いました。つまり、参考文献、参考事例を参考するだけではなくて、そういったものも加味しながら私たちが言葉と概念を同時に作っていくということです。それから《ちゃつきり節》のお話をお聞きして、やはりお茶っていうのも

色々な摘み方があるということ、そしてやはり手をかければかけるほどグレードが変わってくるという問題があるということ。それゆえ、労働というのも実はいろんなレベルの労働があるのかな、お茶を摘むということだけでもいろんな摘み方がある。それによって出てくるものも違うし、対象が違くと色々な動作が違ってくる。そこで何を生み出そうか、何をイメージしようか、何を出していこうかということによって、更にいろんなヴァリエーションの可能性が広がるかなあと思いました。演奏するときの半音についてなんですが、柳沢さんは、演奏のときに何か日本の楽器のイメージとかを表したりするとか、そういうあたりも受け継いでピアノで演奏するとき何かお考えがありますか。

柳沢 今のご質問の答えになるか分からないのですが、ピアノという楽器は調律師がいて、一応ピッチが決まっています。それで演奏者は強弱をつけたりするとか、フレーズだとか、テンポだとかのことで曲想につなげるわけなんですね。それで今の半音の問題なんですけど、これは日本の音楽だけではなくて西洋の音楽でもあったと思います、ピアノの前の時代、チェンバロの時代というのは演奏者が調律して、しかも曲によって調律を少し変えていたとか、そういうこともあるぐらいです。それから、弦楽器、管楽器となってくるとピッチが演奏者に任されるという部分が大きいという話があるわけなんですね。それからピアノ楽器っていうこと。まあ、今日使用しているピアノは国産のピアノなんですけれども、西洋の楽器にスタンウェイとかベーゼンドルファーとかブリュートナーとかあります。本質的な音の違いっていうのがあると思うんです。一昔、私が小さい頃は日本のピアノは音が悪くて、外国のピアノはいいのだというようなことで片付けられていた覚えがあるんですね。ところがこうやって日本が世界の先進国に並んできて、いろんなことが紹介され比較されていく中で認識されてきたことは、良い悪いで比較するような時代じゃなくなってきたそれよりも、特徴っていうか国民性っていうか、または民族性っていうことがそこに加味されているというふうに思うわけです。それで先ほども音の響きということで申し上げましたけれども、日本人の脳だとか、西洋人の脳だとか、右脳、左脳ってことも科学的に言われています。それで日本語の特性として母音ってことが必ずあって、その母音の音の文化が日本の文化を支えているのだと。渾然一体化だとか、それから白黒ははっきりさせながらいいとか、そういう日本人の感性に基づくものがあるわけです。それが西洋の楽器になっていくと明るい音色。しかも透き通っている。表すものがはっきり見えるけれどもはっきり見えるだけに色々なものを入れていかないと、たくさんのかたちを表現するにはたくさんのかたちをやっていかないと表現できない、というものがあると思います。ところが日本の場合には少ないことでもってたくさんのかたちを表現するという国民性の持つ手段があります。和歌だとか、先ほどの和楽器のギニアールさんの音なんかを聴いてまして、ひとつの弦の中であれだけの表現ができるっていうこれはやっぱり文化…たまたま今は音楽を中心にやっているわけなんですけれども、これを日本、われわれの国、民族という視点でとらえていくということ。そのような考えを基盤に考えていかないと解決しないし、まあ解決って言葉が非常におかしいのですが、日本と他の大陸、ヨーロッパ諸国ということをやっつけていかないといけないんじゃないかっていうのが、私の今思っ

ているひとつの課題です。と申しますのも浜松に国際ピアノコンクールができてもう数回になります。私も2回目のときに解説者ということで全部を聴いたことがあります。ピアノは各自で選ぶわけですが、その期間中全員のピアノ聴いてみますと、それぞれヤマハ、カワイ、それからスタンウェイ、ベーゼンドルファーとみんな出てくるわけです。そのとき思ったことは、弾く内容はともかくとして、そのピアノの音色を重点に聴いてみますと、やっぱり明らかに違うなっていうのがよし悪しではなくって、やっぱりそのピアノの特性、誰がどこの国で作ったのかっていう特性があるんだなっていうようなことを強く感じた覚えがあります。」

中村 《ちゃつきり節》の件なんですけれども。北原白秋自身が「ちゃつきり、ちゃつきり」というのは、ハサミの音だけのことでなくて、例えばちゃきちゃきの江戸っ子というような古くから使われている非常に歯切れの良い言葉を参考にしていると述べています。逆に言えばハサミを非常に意識しているという問題です。先ほどお話しましたように、白秋が見に来た主な茶畑はこの近くなんです。つまり山間地域の急な斜面でハサミで使うのは技術的に非常に難しいものですから、昭和30年になってようやくハサミを入れたという所もあります。しかし平地においては、大正から昭和にかけて急速にハサミが広がっていきまして、茶業会議所や、茶商業者の間ではハサミで刈ることによって品質が低下しては困るのではないかということが盛んに議論されているのが大正から昭和の初めなんです。そして統計上見ますと、昭和の初期に約10万丁だったハサミがですね、16～17年になりまして16万丁くらいに増えています。ですから平地において、賃労働の問題も絡んでハサミが急速に普及していくということは、これは実証的に間違いのない話でありまして、近辺の茶農家の日記を見ましても昭和の初めに一番茶を始めて、最初はもちろん手摘みなんですけれども、5日目か6に目ぐらいからハサミを使い始めたという記録もございます。ですから、どういう地形でどんな技術が展開されるかという問題は実は非常に重要なポイントでありまして、山間地域と平地においてはハサミ採用には年代的なズレが非常にあるということでご理解いただければよく分かると思います。逆に言えばですね、民謡というものはそれぞれの地域というものを非常によく反映しているわけです。ですからもう1つちょっと苦言めいたことを言わせていただきますと、先ほどのお話の中で、そうした細かいどこそこの何々といったような、そのどこそこの部分を捨象していくというようなお話がございましたけれども、逆に言えばどこそこが消えちゃったら民謡じゃなくなるんじゃないかという一種の自己矛盾を内包している問題でもあるんじゃないかという気がいたします。この地域という問題をどう扱うのかということは非常に難しいなあと思います。つまり地域を捨象した普遍的な民謡というものがあるのかないのかという根本的なことがいずれ直面する問題にはなるかもしれないというふうに思いました。」

小西 ありがとうございます。そこから、またどこそこに戻っていくという、逆のところも私どもは期待したい部分もございます。というのは、やはり地域によってあるいは合併によってどんどん市が拡張していく中で、「どこそこ」という小さな地域というのが今後どうなっていくかっていうところが非常にこの先懸念されるところだと思います。そういう中で、逆にそうであるからこそ、

「どこそこ」っていうことにこだわりたいっていうこともあるかもしれません。私どもは、こういうモチーフがあることを提示することによって、「これは違う」、「うちはこれなんだ」と刺激になる部分もあれば、と多少期待しています。いかがでしょうか、はさみの問題。非常に面白いですね。やはり地域による差があるということですね。地域をさらに拡大して、静岡で始まったものが今度鹿児島に移って、「いや鹿児島は違うんだ」とこのような試みをきっかけに、それぞれ自分たちの文化というものをもう一度見直してそこから再創造が生まれていくような動きにつながればと思います。私どもは、権威主義から脱却してみんなで考えながら新しいものを作っていくといった方向に転換ができないかと考えています。

土門 拓殖大学北海道短大の土門です。話の流れを私ちょっと変えてしまう可能性があるんですが、申し訳ございません。基本的に今日パネリストの方ならびに提言されてる方たちがお伝えしたいことというのは、この5ページに出ているこの最初から何行目でしょうか2, 4…6行目、子どもたちを初めとする一般市民には今までのような形をただ再現してもなじみにくいんだ、というところが一番重要なポイント、そこが起因してこういう再生をするという取り組みを専門家の方たちと地域の方とでやろうというご発言だと思います。であれば、なぜそこに子どもたちに身体で浸透するようですね、わらべ歌と言っているのかどうかは分かりませんが、それぞれの地域で伝承されている曲をモチーフにしてその地域の子どもたちが楽しめる、幼稚園さんとか保育園さん、小学校さんで導入してもらえるようなそういう曲としてですね、現代っぽいもうちょっと軽快な曲でも元気が出る曲でもいいですし、そういう曲をその地域の子たちそれぞれが、Aという地域、Bという地域、Cという地域それぞれが違う歌をもっていて、大きくなったときにそれを口ずさむと、あなたはどちら出身ですかということが静岡の人たちが皆さんそれぞれの地域の歌をもってる。そういう考え方は例えば教育委員会ですとか地域の方たちと共同してやる可能性としては、可能性ありますよね。で、私たちは幼児教育という観念で例えば卒園式の歌ですとか、卒業式の歌ですとか、幼児の歌ですとか、とにかく子どもが口ずさまなければ全く意味がないというふうに強く現場から教えられている関係上ですね、芸術的に高いかどうか、例えば半音の問題も含めていろんな、ハサミの問題も入るかもしれません、ただ私はもっと低い次元というか考えなのかもしれませんが大切なのはやはり子どもたちが伝承していけるかどうか、生活の中でそれが音楽としてちゃんと取り込まれるかどうか、そこにかかっているような気がしてならないです。ですから細かな各論については私は全く分かりませんが、大切なのはやはり子どもたちとどういうふうに共有していける音楽であれるかどうかということに私はポイントがある気がしましたので、ちょっと流れを変えることになりましたけど以上の発言をさせていただきます。ありがとうございます。

小西 ありがとうございます。地域の子どもたちまさに非常に重要なポイントを抑えてくださったご発言だったと思います。それから、静岡県民といってもたとえば静岡と浜松には地域の差も色々ありまして、方言や言葉の少しのイントネーションの違いとか、地元の間人ならこそ意識している

差があります。子どもたちがいかに自然に身につけたものをもって、またどのレベルから地域のものを学習していくのか。それから大人たちから子どもたちに継承していく中で、地域のもっているもっているものをどう伝えていくか。それを子どもたちがどう消化して、それをどう表現していくかっていうところですね。そういう取り組みであればこそ非常に地域になじむということになっていくかと思います。実際的な取り組みとしては、例えば地域の保育園とか幼稚園なんかで作品を披露してみても子どもたちの反応をみることも大事だと思います。

草下 徳島の草下でございます。私はとっても興味深いご研究だと思い聞かせていただきました。またその中で再創造という部分と奏演という言葉について小西先生から解説していただきました。私自身、その内容には非常に興味がありまして、過去に私のおる徳島県で漁師の唄を調査したことがございました。その際に、民謡という文化のあり様はその時代によってどんどん 変わるということが理解できます。ですから今、先生方が再創造という過程で、新たに伝統的なものをご研究されて、その中からモチーフを導き、新たなものとして再生される。あるいは創造されるという経緯で最も大事な点は、市民参加型を目指したとありますから、これは静岡県でないとできないもの だと思いますし、県外から見れば静岡といったら《ちゃつきり節》です。この点では既に完全に全国 にこの《ちゃつきり節》はいきわたっており、静岡と言ったら茶歌は《ちゃつきり節》です。従ってそれについては何にも疑問を持ちません。そういった既に認知された伝統的なものに、今創造されているものがですね、先ほど土門先生のお話にもありましたけれども市民に受け入れられて、ある長い時期それが継承されていけばですよ、本来の意味の静岡の新しく、そのときはもう古くなってるかもしれませんけれど、新しく再創造された茶歌ということになっていくのではと思います。そういう意味では非常に興味深く拝聴させていただきました。ありがとうございました。

原田 静岡市の原田と言います。感想といたしますか、お願いといたしますか。私たち 1960 年ごろから地元の民謡といたしますか芸能を含めて掘り起こしというような活動をしまして、いくつかの民謡や芸能を採取してきました。当時、合唱団としてやったものですから、いろんな人が各地飛び歩いてやったんですが、まあ当時録音器もないような時代でもありましたので、色々失敗もありまして資料として残っているのは少ない。その当時、「今やとかなないとなくなっちゃうぞ」ということで、それらを集めて新しい日本の音楽の創造や、今言われている歌の再創造ということを担ったわけです。再創造というと非常に難しい問題がありまして、我々は大きな仕事はできなかったわけですが、その当時から思っているのは「とりあえずは今あるものを残していこう」ということで、まあそういうものに親しむということで、歌ったり踊ったりということをやってきたわけです。今も大切なのは県でもそうですし、いろんな方が残しているわけですが、そういうものが採取されただけで先ほどもありましたように音として聴かれる機会って非常に少ないと思うんですね。私は、まずそういうものを聴く機会を増やすことが、是非必要じゃないかなと思います。まず分るとか分からないとか前に、聴いてみないことには日本の音楽がこういうものだということ

とを伝えていくということができない、最初から再創造したものだけを聴くんじゃなくて、元を聴くのが必要じゃないかなというのをちょうど感じています。日本というのは世界の中でもいろんな音楽が混在している国だというふうに、まあ私個人的な感想ですけども思うんです。そうしますといろんなジャンルからの取り組みっていうのが当然あるわけで、茶歌に限って言えば歌とメロディーと歌詞があるだけなんです。それを楽器にどう置き換えるとかということになると、先ほど半音の話が出ましたが日本の音楽の構造自体の問題も関わってくるんじゃないかなと。そういうことの上に、日本の新しい音楽というのはできているんじゃないかなと思うんで、いろんな試みが必要ではないかなというふうに思ってます。茶歌に限ってみても、茶歌、あるいは茶節とか言っていましたけども、「5月半ばに静岡とおりゃ、何だっけ、汽車の中だよ茶の香り」っていうのがちょっと出てきましたけれども、あの歌詞は金谷のほうの茶節にもありましたし、静岡にもあるし、同じような歌詞がたくさん出てくるようですね。似たようなのがあるわけですが、そういう関連なのがどこもきつとあるはずなんです。まずそういうものをまとめていく仕事とともに再創造の取り組みを期待したいです。今日は、前に録ったものをCDにして持って来ましたので必要があれば提供したいと思います。すいません。よくまとまりがありません。

小西 どうもありがとうございました。私どもはこれで結論づけるということではなくて、この次の場へと是非とも続けていきたいと。議論を重ねていくこと自体が1つの運動になって、ここに参加されていない方々もこの運動に対して関心をもっていき、その中で色々広がっていく。そのことによって地域に広がりながらその独自性も広がるかもしれないし、1つの流れとして、あるいは今まで散っていたものも集まってくる場が作れるのではないかなというふうに期待をしております。それでは最後になりましたが、パネリストのほうから一言ずつ最後によろしくお願ひしたいと思います。中村さんからお願いします。

中村 私個人の立場から言えば、先ほどから何度も申し上げておりますように、民謡という言葉にも非常にこだわりたいわけであります。民謡というものをどういうふうに捉え、それをどのように展開していくのかという、民謡そのものの原点ということをは是非しっかりふまえた上で、その上でのヴァリエーションの組み立てということをやっていたら、本当の意味での地域に還元できるものができるんじゃないかなということを感じます。以上です。

須山 先ほどどなたかのご意見にございましたけれども、かつての貴重な音源の記録みたいなものを学校教育、その他のところで、できるだけ聴く機会というものをもてたらいいなと。そういう方向でできるだけ奨励をしていけたらいいなというふうに感じました。

吉田 様々な立場から様々な年代層の方のご意見を伺いまして、私も自宅では幼稚園からだいたい70歳代ぐらいまでの門下生を指導しております。そういう方たちが同じお箏の曲を弾きましても全然

捉え方が違います。興味をもつ部分はやはり個人差がありますので、それはそれでいいのではないかと思います。また、色々な捉え方ができる曲ほど良い曲として後世に残っていくものだと思いますので、また機会がありましたらいろんな方のご意見をお聴かせいただきまして、私もまた学校とか、それから自分の門下生たちにそれを生かしていけたらと思っております。ありがとうございました。

小西 ありがとうございました。それではたくさんの方々のご参加、パネリストの方々を始めフロアの方々の貴重なご意見を賜りまして、本当にどうもありがとうございました。先ほども申しましたが、これで終わりということではなく、これをスタートにしたいというふうに考えておりますので、これからも是非ともよろしくお願いしたいというふうに思います。

アンケート

以上シンポジウムの内容である。このように白熱した質疑応答がなされて、参加された方の関心の高さを知ることができた。このとき回収したアンケートの一部を次に載せておきたい。(最初のものはアンケート用紙をコピーしたもの)

ご参加の皆様へ

本日のシンポジウム「静岡の茶歌再創造と現代的奏演」についてのご意見、ご感想を自由にお書きください。

企画から内容もすべて充実した発表で大変有意義な
研究会だった。次のステップへの期待も大きなものか
がある。又同じ性をもった方にも支えあえる関係と
見出しがこれ、これからますますおもしろい世
界の世界を大いに期待します。

(沼津市 T氏)

興味深く拝聴させて頂きました。全くの門外漢ですが、個人的に、伝承、発掘された茶歌を現代ニーズに合わせて再創造するプロセスに大きな可能性を感じました。「茶歌ヴァリエ」のCDリリースが楽しみです。

(北海道 K女性)

静岡の茶歌を保存から再創造への発想、転換、奏演、市民参加型というテーマで研究されているのは素晴らしいと思いました。

初めて、このプロジェクトの内容を聞かせて頂きましたが。会議というか、話し合いを聞いていて様々な静岡の地域でこのシンポジウムをするべきではないかなと思いました。静岡の地域は広範囲であるので。シンポジウムというかたぐるしい物ではなく、子供たちの意見を取り入れるために学校などで話をする機会をもつなど。(匿名希望)

伝承された具体例から重要と思われる要素を抽出し、茶歌というカテゴリーのプロトタイプをモチーフという形で提示する。このプロトタイプから新に創作することによって現代に受け入れられる新たな民謡が創造できるというお考えであると理解しました。

興味あるプロジェクトだと思いました。

私は作曲をいたします。その立場から思いますのは、プロトタイプと同時に、そのもととなった演奏録音も同時に聴くことができればいいと思いました。プロトタイプも含めた全体から茶歌の全体像を感じることができるのではないかと思います。

そしてその全体を著作権フリーの表材として公開していただくことによって大きな広がりを持っていくのではないかと勝手に想像しています。(長崎市 K氏)

報道関係

このシンポジウムに先立ち、「生まれ変わる静岡の茶歌」として本プロジェクト紹介記事が掲載された(2005年6月8日『静岡新聞』夕刊1面、写真Ⅲ-1)。これによる本プロジェクトの市民への周知効果は高く、前章で触れたように聞き取り調査で協力を得た落合宏雄氏もこの記事を見て問い合わせをして下さった1人である。懇話会でご意見をいただいた高崎氏、シンポジウムでご発言いただいた原田氏をはじめ、静岡県内には個人またはグループで民謡収集や研究を行っている方々が何人かいる。しかし、相互交流の場がないこともあり、得てしてその成果が公表される機会も限られる。本調査研究を通して、今後は大学が中心となって、そうした市民の方々を繋げるネットワークづくりをしていくことが求められると考えた。

さらに、シンポジウム終了後にその内容にも触れた日本音楽表現学会大会の紹介記事が掲載された(2005年7月3日『静岡新聞』朝刊総合欄、写真Ⅲ-2)。なお、設立して間もない同学会の2回目(設立大会を含めると3回目)にあたる本大会(通称:アクアブルー大会)は、われわれ3人を含む静岡大学教育学部音楽教育講座スタッフが企画運営にあたったものである。学会メンバーはほとんどが西洋芸術音楽の表現に関わる者であるが、古来から東西文化の交流点として栄えた静岡県にふさわしい企画として、今回はあえて西洋人である薩摩琵琶演奏家のギニャール氏を招聘して演奏を交えた公演を行ってもらった。本シンポジウムは、その後に行われたものである。

“生まれ変わる静岡の茶歌” 記事

写真Ⅲ-1 本プロジェクト紹介記事（2005 年 6 月 8 日『静岡新聞』夕刊 1 面）

「現代的な民謡演奏も」
全国学会開幕 音楽表現考える

写真Ⅲ-2 日本音楽表現学会大会紹介記事 2005 年 7 月 3 日『静岡新聞』朝刊総合欄)

3. イベント

静岡大学茶歌プロジェクト・音楽パフォーマンス

2005 年 10 月 29～30 日 於：静岡市立日本平動物園

本イベントは、シンポジウムの成果を受けてより広く一般市民の前で茶歌の再創造に関する成果を公表する機会として、静岡市立日本平動物園のご協力によって実施したものである。これに際しては、まず 2005 年 7 月 22 日に同園学芸員・佐渡友陽一氏と打ち合わせをし、恒例の「秋の動物園まつり」期間中に実施すること、また人出の少ない雨天にも対応できるように 2 日間設定すること、パフォーマンスの場所については電源の確保と楽器管理の都合によって入場門すぐのピロティを使用することなどを打ち合わせた。

動物園は、音楽鑑賞や茶文化への特別な関心をもつ人々だけが集まるわけではない。それゆえ、再創造した茶歌を披露し評価を受ける場としては最適だといえるが、ピアノを持ち込むことが不可能であることや動物を刺激しない音響環境を保つ必要があるという制限があった。そこで、ピアノ演奏による《茶歌ヴァリエⅠ》《茶歌ヴァリエⅡ》については、ビデオ上演することにした。また、シンポジウムでさまざまな楽器編成による茶歌へのニーズがあることが確認できたため、この場で演奏可能なピアノ以外の楽器を使った新しい演奏によるパフォーマンス演目を立てることにした。

その1つがトイピアノ（いわゆるおもちゃのピアノ）による即興演奏である。演奏は、寺崎庸氏（当時静岡大学教育学研究科1年）に依頼することにした。これにあたっては、大槻が8小節からなる茶歌の《モチーフ》を寺崎氏に提示し、若い感性に任せた即興演奏をするように支持した。茶を飲む場にふさわしくするため少し都会的に洗練された響きをもつ《茶歌ヴァリエⅠ》《茶歌ヴァリエⅡ》とは異なり、子どもたちも馴染めるかわいらしい音色による演奏となり、終了後もトイピアノに手を触れる子どもたちもいた。もう1つが静岡ウクレレクラブによる、ハワイアンスタンダード曲および同指導者である竹島康博氏の作詞作曲による《ウクレレ茶歌》および《茶刈機音頭》である。

ウクレレで茶歌演奏

写真Ⅲ-3 プロジェクト主催パフォーマンス紹介記事（2005年10月30日『静岡新聞』朝刊）

プロジェクト・メンバーの小西は、2005年8月6日に開催された静岡健康文化交流館「来・て・こ」主催のイベント「来・て・こ de 夏休み」（カラー写真45参照）に参加協力したこ

とがきっかけとなり、60歳以上の市民から構成されるハワイアン・アマチュアバンドである静岡ウクレレクラブとの交流があった。そこで、ウクレレ版の茶歌へと再創造することを提案し、2005年7月19日と8月10日に浅野富夫氏（当時の代表者）および上記の竹島氏との打ち合わせを行い、竹島氏が新曲を創作・披露することで了解を得た。このパフォーマンスの様子は、新聞記事として掲載された（『静岡新聞』2005年10月30日朝刊）。

当日は、静岡大学学生（細澤ころろ〔当時2年〕、野田明日香〔当時1年〕、山城郁代〔当時4年〕、ツォク〔当時教育学研究科2年〕）も参加し、準備および子どもなど来場者とのコミュニケーション、アンケート記載依頼などをいった（カラー写真44参照）。残念ながら、第1日目は雨天のため入場者数は少なかったが、静岡市立日本平動物園へのイベントに対する問い合わせもあり、動物園と茶歌とウクレレ、トイピアノという異色の組み合わせによるパフォーマンスへの市民の関心の高さがうかがわれた。

静岡県茶文化普及啓発事業「静岡音楽茶^サロン」

2005年11月17日 於：グランシップ6F、交流ホール

本イベントは世界緑茶協会主催によるもので、先のシンポジウムを聴講した当時静岡県お茶室・野毛勉主査からの協力要請にこたえ本プロジェクト協力事業として開催された。新しい茶文化の創造を促すことを目的とし、O-CHA フロンティアコンテストおよび平成17〔2005〕年 O-CHA パイオニア賞表彰式、同コンテスト出品茶の展示、同金賞受賞茶ウェルカムティーサービス、緑茶を使った創作菓子（ハーブ緑茶と抹茶を使ったシフォンケーキ、濃茶のティラミス、お茶のフィナンシェの盛り合わせ）付の喫茶および成果発表の場としての音楽プログラムから成り立つものであった（カラー写真40参照）。O-CHA フロンティアコンテストとは、新しいコンセプトを持った「明日の銘茶」の発掘を通じて緑茶の需要拡大を図るために毎年開催されているお茶のコンテストであり、同年には70点の応募があった。ものである。サロン風に仕立て丸テーブルが設置された会場で、参加者にはがふるまわれた。

音楽プログラムにおいては、小西の解説を交えながら柳沢によるピアノ演奏で《モチーフ》および《茶歌ヴァリエⅡ》を披露した。今回特別に調達したウィーンのベーゼンドルファー社製のまろやかで温かみのある音色に、参加者は熱心に耳を傾けていた。次に、《モチーフ》を若々しさと独自の感性、テクニックを使ってアレンジした寺崎庸（当時静岡大学教育学研究科1年）による《茶歌即興変奏》を披露した。同じモチーフを使っのピアノ演奏でも、全く異なる趣の音楽に展開できる可能性を示すためのものであった。

休憩を挟んでの後半は、異なる種類の楽器を使って《モチーフ》の展開を試みるものとした。その第一番目として、ツォク（当時静岡大学教育学研究科2年）による《馬頭琴による茶歌》を披露した。ツォクは、中国内モンゴル出身で民族音楽学を学ぶ学生である。これまでも、一般向け演奏会での演奏経験があったが、今回は大槻が《モチーフ》の楽譜を手渡し、「好きなように演奏を展開するように」とのみ指示した。それに対して、ツォクは「幼少時に

祖父母と過ごした草原を思い出しながら演奏を試みる」と参加者に説明し、楽器の特性を生かしたモンゴル風の茶歌を披露した。

続いての《サクソフォン4重奏による茶歌変奏》では、静岡大学サクソフォン・カルテット（志村朋子、小野恵子、北田裕亮、滝上裕美、いずれも同教育学部4年）が大槻作曲の同曲を披露した（カラー写真46参照）。プログラムの最後は、静岡ウクレレクラブによる《ウクレレ茶歌》《茶刈機音頭》であった。メンバーの熱意が十分伝わる温かみのある演奏に参加者も喝采し、最後にはあらかじめ配布しておいた歌詞カードを見ながら、参加者全員で《茶刈機音頭》をうたった。

本イベントで行ったアンケートでは、以下のような回答を得た。

茶歌プロジェクト・アンケート

●プロジェクトへのご意見

「茶歌^{歌の}と聞いて、最初は少々古いイメージをもちましたが、
実際（ピアノ）演奏を聞いて、とても美しく、心地良い、
ちょっとジャズっぽい感じで、お茶をゆっくりと味わい
ながら、のんびりした時間を過ごしたいと感じました。
また、ピアノとサクソフォンでは、音楽のイメージも
ずいぶん変わるのだと驚きました。

お茶とウクレレという異色な組み合わせにも
ビックリ！ ~~お茶~~ ゆっくりなリズムが
お茶にぴったりでした。とても良かったです。
新しいアイデアだと感じます。

（20歳代 匿名希望）

お茶を通じて様々な音楽・スイーツに出会えたことを大変うれしく思いました。茶歌は人と人の心を結びつけられる素晴らしい可能性があると感じました。大槻先生の《茶歌ヴァリエⅡ》、とてもすてきな曲ですね。本日はありがとうございました。（30歳代 匿名希望）

本日はありがとうございました。新しい解釈や新しい試みに敬意を評します。お茶をテーマに、お茶の文化を持つアジアの人々がそれぞれの演奏会で茶歌を披露してくれたり、お茶を使ったスイーツやお茶が出たりして大変楽しめました。食と音楽の融合という可能性はこれからも広がっていくと思います。さらに新しい曲が生まれてくることを期待しています。（30歳代 匿名希望）

静岡に来て4年。お茶が生活の奥深くまで浸透していると感じました。東北出身の私は少しびっくり！《ウクレレ茶歌》、のりがよくて好きです。静岡の名産、お茶を探求するって素晴らしいですね。

（20歳代 焼津市匿名希望）

なお、このイベントの様子は即日からテレビ（静岡テレビ 2005 年 11 月 17 日 20 時 55 分からのニュース、NHKテレビ 2005 年 11 月 18 日 6 時 50 分および同 7 時 30 分からのニュース）で放映された。また、『静岡新聞』（2005 年 11 月 24 日朝刊）にも取り上げられ、次のような記事が掲載された。



ピアノ、ウクレレお茶と一緒に満喫

写真Ⅲ-4 音楽茶ロン紹介記事（2005 年 11 月 24 日『静岡新聞』朝刊）

4. 講習会

茶歌の新しい演奏表現を習得するためのヒントとして、箏の演奏法に関する講習会を開催し、学生を中心に関係者に呼びかけて参加を促した。講師としては、これまで懇話会やシンポジウムにもご協力いただいた吉田理世、吉田道美氏に依頼をした（カラー写真 47、48 参照）。

第1回 箏の講習会

2006年2月14日 10:00～12:00 静岡大学

講師 吉田理世 吉田道美各氏

参加者 大槻 柳沢 小西 大学院生・学生・プロジェクト関係者7名

主な講習内容

箏の設置 柱の立て方 音あわせ 座り方 基礎練習 《さくら》の演奏

今回の講習によって習得したことのなかで特に注意すべき点は、弦をはじく時の手、指の力のかけ方や肘や肩に力を入れないことであった。また、箏は購入時には既に弦が張られた状態にあり、断弦の時には職人に張りなおしてもらうとの箏であった。

第2回 箏の講習会

2006年2月24日 10:00～12:00 静岡大学

講師 吉田道美氏

参加者 大槻 柳沢 大学院生・学生・プロジェクト関係者5名

主な講習内容

流し爪・引き連・輪連・かき爪・わり爪・合せ爪の技法修得 戻し弾きの練習

2つのグループに分かれて《さくら》の合奏を行った。

（茶歌ヴァリエⅡ）箏曲合奏への編曲

2度に渡る箏の講習会を経て、学校教育への伝統音楽と地域文化の導入という両面から《茶歌ヴァリエⅡ》を中・高等学校用箏曲合奏へ編曲しようという意見が提案された。講習会受講者の1人で大槻が作曲の指導を行った小菅由加里氏と講師を務めた吉田理世、吉田道美各氏は連携してその編曲試作を行うこととなった。演奏指導の実際に詳しい両氏と作曲家が密接な連携をしながら、試作作品の運用を教育現場で取り組み始めている。

5. その他学会参加等

以下での学会で、聴講および口頭発表とそれに対する質疑応答によって、民謡の再創造・奏演と現代社会における技術や民族問題との接点について、知見を広めた。

聴講

「ユビキタス社会のサウンドスケープ」(日本サウンドスケープ協会シンポジウム 京都市上京区 キャンパスプラザ 2004年5月30日 小西)

「アイヌ少数民族の学校教育における理解実践研究報告」(第2回日本音楽表現学会大会 北海道札幌市 北海道教育大学 2004年6月5日 大槻・柳沢・小西)

「アメリカ合衆国東欧移民のアーカイヴス」ほか(日本国際文化学会第3回大会 神戸市灘区 神戸大学国際文化学部 2004年7月3日～4日 小西)

口頭発表

「音楽身体表現集団 The Pacific Eels の挑戦」

第2回日本音楽表現学会大会 札幌市 北海道教育大学 2004年6月6日 小西

2003年8月にグランシップで開催された「こどもわくわくワークショップまつり」に参加した静岡大学学生からなる The Pacific Eels の活動内容などを紹介し、地域と大学を結ぶ現代的奏演の事例について報告をし、参加者から今後の発展にとって有意義なコメントをいただいた(詳細は、学会誌等掲載論文・小西③参照)。

「ミクロネシアの行進踊りと日本語の歌について」

太平洋芸術祭と南洋踊りに関する研究会 父島 地域社会福祉センター 2004年9月12日 小西

2004年7～8月にパラオ共和国で開催された第9回太平洋芸術祭を訪問し、南洋踊りを披露した小笠原村の南洋踊り保存会メンバーとともに行った小笠原村民のための報告会である(詳細は、学会誌等掲載論文・小西④⑥、および Konishi⑧参照)。

“Special workshop for Palauan-Ogasawaran dance communication”

Study Group meeting on Music and dance in Oceania meeting, Palau: Ngarachamayong ぐっら 1 Center 2004/08/02 Junko Konishi

上述のパラオで開催された太平洋芸術祭に参加した国際伝統音楽学会のオセアニア音楽研究グループによる会合でのワークショップを主催した。小笠原村から参加した南洋踊り保存会メンバーに南洋踊りを披露してもらい、パラオをはじめ各国の研究者よりミクロネシア地域に伝承される行進踊りとの相違点について議論した。

“Ogasawaran dancers' encounter with Pacific dances: a report from the 9th Pacific Festival of Arts in Palau”,

The 1st international small island cultures conference, Kagoshima University 2005/02/07, Junko Konishi

上述の第9回太平洋芸術祭に際して、小笠原村の南洋踊り保存会メンバーによる同訪問およびパラオの踊り手たちとの交流を小西が取り持ったことを例に、研究者としていかに

して小島嶼地域の文化振興にかかわることができるかという可能性について述べた。

“A Consideration of the origins and diffusions of the Micronesian marching dance based on historical documents and oral traditions from Pohnpei Island and Mwoakilla Atoll”

International Council for Traditional Music, Sheffield: Sheffield University 2005/08/08

Junko Konishi & Takuya Nagaoka

ミクロネシアの行進踊りに関して、特に東ミクロネシアの調査に重点をおいた研究成果を
ミクロネシアの行進踊りに関して、特に東ミクロネシアの調査に重点をおいた研究成果を
発表したものである。共同研究者であるニュージーランド・オークランド大学大学院の長
岡拓也氏との電子メールでの頻繁なやり取りをもとに成果をまとめた。学会誌等掲載論
文・小西⑦をさらに発展させた最新の研究内容である。

IV. 課題と展望

IV. 課題と展望

1. 《茶歌ヴァリエⅡ》の創作について

私は地域の民謡研究とそれらに関わる卒業論文修士論文指導をこの約 10 数年近く行ってきた。その中で、記録保存として常によりどころとしてきたのは 1980 年代に全国的に行われた民謡緊急調査の静岡県版である。これは幸いなことにデータの記録整理（時期・場所・演奏者）が良い上に、音源としても旧県史編纂室に 100 本以上のカセットテープが保管されてきており（現在は静岡県中央図書館へ移管）、年々直接的な伝承者が急速に失われる中、ますます貴重な資料となっている。残念なのは音源資料の楽譜化と音楽的考察が不十分であり（一部は CD 化され代表的なものは歌の分類と伝承をまとめ静岡県から出版されているが、音楽的構造分析や考察についてはあまり踏み込まれている様には思えない）、複数の研究者による検討継続が今後必要である。

今回は、それらの民謡から

- 1, 特に茶節といわれる類（茶きり、茶もみ、茶選り唄等）の分類成果
- 2, 沼津の高崎譲寧氏による「大正茶節幻のレコード発見」資料の検討
- 3, 町田嘉章作曲の《ちゃつきり節》を静岡第一テレビ天気予報 BGM 用室内楽へ編曲した際の経験。

以上の 3 点を拠り所として再創造としての作曲を行った。

《茶歌ヴァリエⅠ》ないし《茶歌ヴァリエⅡ》（巻末掲載の楽譜参照）のテーマの拠り所となったのは、2 の茶摘み（駿河節）沼津市・久土ふよ氏の歌声（今回 2 の高崎氏復元の大正 SP レコードのカセットテープを CD へ複製した）（『日本民謡大観中部編』p.206、楽譜参照）他、旧静岡市豊田村や大河内村など一般に駿河節の茶摘み唄に見られるレーファース（長 2 短 3 の構造によるテトラコード）を基準に考えて旋律の骨格として用いている。但し通常、駿河節がディス・ジャンクト型（非接続型）のテトラコード連結（レーファースにラードーレを連結）を取るのに対して、より古い連結のコン・ジャンクト型（接続型）レーファース＋ソーシードを用いている。又テーマ部は完全 4 度を主にした縦の響きで旋律を重視している。それ以降の展開はテーマの開始 3 音を動機的に扱って機能と声折衷使用による楽曲をとなっていてテーマ部と対比している。

1 の中から民謡再創造としてのヒントとしては、京の都からは遠方に当たる駿河節が比較的遠州節より音域が広いと言う点と、遠州節においては高音域で 4 度飛び 3 度下がり（レーソーミ）或いはソーミ間での節回しに結構好みが見られる点である。駿河茶節では一直線にオクターブを上行しきる唄い回しが印象的である。これらの特徴は《茶歌ヴァリエⅠ》ないし《茶歌ヴァリエⅡ》のどこにどの様に取り入れたかは明記出来得ないが、作曲上の意識としては常に感じていた事である。

2 の複製 CD を何度も聴取した結果、大正時代の茶節には座敷唄以前の仕事唄としての茶節の力強さや伸びやかさ、といった事が強く感じられた。民謡が発生時点から仕事内の

娯楽的要素を持っていたとしても、《ちゃつきり節》などの楽しさや娯楽性とは勢いの点でかなり異なるものであることが理解出来た。同時に茶業が第2次世界大戦以前の我が国にとっては外貨獲得の貴重な輸出産業であり、関わる人々も国策としての意識が相当強かったことが偲ばれた。

3に関しては、民謡とグローバル化・普遍化というような事までは考えただけではどうにもならない点であるが、30年前に偶然行った《ちゃつきり節》の室内楽編曲と放映中の反応は今回の再創造行為に大きな影響を与えた。今回はオリジナルの油彩画1点の価値云々というようなことより、多種多様な変奏をすることや再創造運動の発火点や起爆要素としての作曲を意識した。

平成16〔2004〕年の前半に試行錯誤の上《茶歌ヴァリエⅠ》が誕生し、12月に専門家による懇話会の席上柳沢氏による演奏で初披露された。この中で私が特に改変意識として残った提案は、「茶節には合いの手・掛け声が入るのが一般的ではないか」というものであった。その結果を受けて、《茶歌ヴァリエⅠ》に手を加えて改編した《茶歌ヴァリエⅡ》では、前出の久土ふよ氏の歌声にも聞こえる合いの手「ドウシタ、ドウシタ」を参考にして楽曲に組み入れた。その他複製CDの唄声に見られる強い出だしの民謡を思い浮かべて、繰り返しの主旋律の前にアクセントのある出の旋律を加えた。ピアノ演奏の音型としてはやや難のあるものとなって演奏効果はプラス面ばかりでは無いかも知れないが、懇話会の貴重な対話から生まれた改変である。

演奏者の柳沢氏と密着して懇話会、シンポジウム、その他の発表機会を経験することにより表現者からの貴重な意見を得ることが出来た。ピアノも楽器によってメーカーによってかなり音として伝わる内容も異なってくる事が鮮明に理解できた。まだ詞のある歌としての再創造が出来ていないが、これも順序の正当性云々ではなく、自然に生まれるべき部分といくつかの試みを準備している。

今回は「民謡の再創造」と標榜しての作曲行為となったが、今振り返ってみれば、民謡は何時の時点でも再創造されているものと考えの方が実態なのではないかと思えるようになった。音にして現在聞こえるものは地域や他地域との交流、時代や流行の重なりといった瘡蓋上の連鎖によって今が形成されている。正確な発生についての情報や伝播の経路を調査することは勿論大変重要な事であるが、同時に如何に音として聞き手に届く方法を案出するのかを考えなければ文化価値の伝播とは結びつかないという実感を持った。

(大槻寛)

文中引用文献

『民謡大観』中部編（中央高地東海地方）日本放送協会編（町田嘉章編修）1960-3 出版 p-206

2. 《茶歌ヴァリエⅠ》および《茶歌ヴァリエⅡ》の演奏にあたって

この楽譜を手にしたときの印象は、まず、小規模ながら、構成がしっかりとして作られている作品であるということであった。民謡の要素からヒントを得たメロディーの「のり」の演奏工夫と、部分的にテクニックの困難を伴うところの修得、また音と音の間の処理の仕方など沢山の課題が盛り込まれている作品の表現の可能性をどこまで追求し、包括できるかが課題であると思った。

一番の課題は、第1小節目の「♪レーファソー（固定ド読み）」をどの様にイメージして弾くかであった。陽旋法を用いたこの第1小節は、小春日和の朝靄に包まれる茶畑の一面に広がる光景が思い起こされる。朝日を浴びて茶の葉の朝露から霞が立ちのぼる、のどかな穏やかな心情である。第2小節では低音部に「♪レーファソー」が模倣されてくる。この時高音部では装飾を伴った音形で下降している。この装飾音は朝日にきらめく露または小鳥のさえずりに喩えられるので、輝きを持って早急に入れる。第4小節は「あいの手」の部分。《茶歌ヴァリエⅠ》にはなかったこの小節を加えることで、《茶歌ヴァリエⅡ》では曲の流れに躍動感と間を持たせて全体を引き締めている。第8小節の高音部の歌い出しは厚い音でエスプレッシーヴォ（感情をこめて）に弾き出すこと。これから茶畑で仕事を始めよう、という気概のある楽節である。第9、10小節の装飾音はあまり早急でなく含みを持たせて。特に第11小節の装飾音はテヌートぎみに民謡のこぶしをきかせるように演奏するとよいだろう。第17小節から主旋律が現れる。低音部の分散和音に載って民謡風な旋律を、自然への賛美、労働の喜びといった心情をもって曲想に反映させることが大切なことであろう。第31小節からは状況に変化が生ずる。雲行きが怪しくなり、雨、風が強まってきた第45小節でそのピークに達する。まもなく治まって第52小節から再び以前ののどかさを取り戻す。

この曲は完全な日本の民謡に見られる旋法を用いているわけではないが、傾向としては西洋音階を含めながら日本音階の性格に裏づけられている。又、演奏解釈の最中に思ったことは、和楽器のイメージを取り入れることであった。箏、尺八、民謡の歌声、そういった日本人に育まれた音の響きをイメージすることで、音符に託された意味合いが不思議と促されるように思える。又お茶の香とか、古今東西の人々がお茶の時間に様々に過している様子などもこの曲に反映されることと思う。

2004年12月11日に静岡大学で行われた懇話会での《茶歌ヴァリエⅠ》の発表を皮切りに、その後改編された《茶歌ヴァリエⅡ》の発表披露を2005年6月15日に自宅でのSBSラジオ放送の収録、続いて7月2日のグランシップでのシンポジウム、11月17日の「静岡音楽茶ロン」コンサートを行ってきた。演奏の機会を重ねるにしたがって、曲の構成をなしている細部の音組織が鮮明に映し出されるようになり、表現されうることの可能性について思い巡らせたことが今、よみがえってくる。すでに述べたが第Ⅰ小節の「♪レーファソー」の音色をどのように作り、響かせたらよいか、大きな課題であった。このフレーズの弾き方如何でこの曲のイメージを決定づ

けてしまうほどに重要な導入テーマである。声楽や管弦楽器であれば音を常に持続させながらこのフレーズを自在に歌うことが可能であるが、ピアノは打弦の後は消音していく楽器であるのでこのフレーズを歌うように弾く、ということが重要なポイントであった。もう1つは第17小節から始まる主題の弾き方である。茶畑の大地を表す左手の分散和音は音を揃えて厚みのあるフレーズ感が必要であるが、高音部の旋律を支える音量に加減しなければならない。この主旋律は口ずさみたくするような民謡調のメロディーであるので厚みのある暖かい音色を作るように心がけた。演奏解釈を進める中で、和楽器、洋楽器を問わず、いろいろな楽器の音色をイメージしながらピアノでの表現の可能性を追求し、曲想を練っていくことが大事なことであった。今後もこの課題を追求しながら演奏に取り組んでいこうと思っている。

静岡県の民謡再発掘というテーマで始めたプロジェクトであるが、静岡の地の利から茶歌に焦点を絞り、その調査研究をしながら、いかに現代の表現にふさわしいかを作品として創造し、演奏の発表を成してきた。この2年間にわたるプロジェクトを終えて振り返ってみると、当初身近なところから調査をはじめて以来、海外にまで調査視察に訪れて思うことは、お茶文化が国境を超えてそれほど人々の間に浸透していることであった。台湾や韓国では茶の店が販売よりも飲むところとして、飲茶を楽しむところとして存在しており、人々の生活に欠かせない場所であることを視察してきた。又、ヨーロッパの街角やニューヨークのメトロポリタン美術館にみるように欧米でも緑茶、紅茶を問わず親しまれていることがうかがい知れた。そして、そこにはおのずから音楽があった。台湾や韓国ではそれぞれのお茶の店でそこにふさわしい音楽が流れていた。又、CDショップを見るとお茶の文字の入ったCDが目にとまる。ヨーロッパやアメリカではロック、ジャズが多いが、クラシックの演奏会の休憩時間にはコーヒー、ワインと共に紅茶がカウンターに用意されている。

日本及び各国のお茶と音楽にまつわる調査をしていきながら感じたことは、この国、その地方、それぞれにお茶の味がある、又それぞれに音楽がある、ということである。同じ曲が流れていても、又同じ曲を演奏しても微妙なところでのニュアンスの相違があり、音楽とお茶に関して一言でまとめてしまうことには無理がある。今回の茶歌の再創造とその演奏発表を通して我々が忘れかけているふるさとの文化にいくらかでも寄与できれば幸いである。

(柳沢信芳)

3. 「民謡」と「茶歌」概念の創造と再創造

そもそも「民謡」とは何をさすのであろうか？『広辞苑』では、「民衆の歌謡。民間の俗謡。庶民の集団生活の場で生れ、多くの人々に長く歌いつがれ、生活感情や地域性などを反映している」と定義されている。しかしながら、現代においてこのような定義に合う「民謡」が生産され続けている地域は、極めて稀といってよい。生活感情を表現するのであれば、大部分の若者はいわゆる J ポップと呼ばれるポピュラー音楽を選ぶであろう。地域性といっても、数十年前とは異なり、離島部を除く国内各地にファーストフードのフランチャイズ・チェーンや大型スーパーマーケットやコンビニエンス・ストアが立ち並び、インターネットで注文した商品が各社で時間短縮を競いあっている宅配便で届けられる状況のなかで意識されているものだということを押さえておく必要がある。「多くの人々に長く歌いつがれ」てきたという部分については、今のところ学校唱歌をしのぐものはないのではないだろうか。そして、核家族化どころか家族内分裂といえる状態が促進されるなかで、「庶民の集団生活」などいかに維持されようか。

『広辞苑』には「民謡」ということばは、明治 39（1906）年頃より普及したとある。それまで、「俗謡」や「俚謡または里謡」と呼ばれていた唄がこのことばの中に包含されていたのだから、実態としての「民謡」はそれ以前から存在していたのは間違いない。ただ言えることは、それがたとえ西洋の *Volkslied* [独] や *folk song* [英] の翻訳語であっても、20 世紀初頭の日本においてこの類の唄に関心の目が向けられたからこそ、このことばが使われるようになり概念が整理されたはずなのである。さらに、『広辞苑』には「広義には地方色を帯びた新作歌謡（新民謡）も含めていう」とある。この「新民謡」が成立したのが、上述の「民謡」ということばの普及と同時期なのである。つまり、別の見方をすれば「新民謡」を創作した文化人の側が、自らの作品と区別するために「民謡」ということばと概念を利用したともいえる。ちなみに、「新民謡」ではない「民謡」のなかには、後藤桃水（宮城）、初代鈴木正夫（福島）、成田雲竹（青森）らが各地方の歌に洗練を加えて、以後「公式な民謡」として普及したものも含まれる。そもそも、ことばとしての「民謡」の普及は新作歌謡としての「新民謡」と 1 セットになったものだったのである。

その時点から 200 年を経たとなると、このことばの定義を再解釈する必要が生じ、またそこに包含されるべき唄や歌が変化するのも当然である。もちろん、古いものの価値は十分に承知している。それゆえ、アーカイヴス（記録保管所）に資料を蓄積していくことは重要な作業だとも認識している。ただ、これまでの研究者や収集家による「民謡」の扱いを見ると、大切なものをきちんと記録保管する行為に留まっていたといえる。一方、中山新平、本居長世、藤井清水ら大正～昭和の戦前頃に活躍した作曲家の方は、「民謡」の価値を発見すると同時に「新民謡」の創作にとりかかり、ピアノ伴奏付きの歌曲として当時の流行を取り入れた作品としていったのである。その結果、その時代には民謡が大流行した。人々に「民謡」への関心を促すためには、このような時代に合った創造行為が不可欠なのであり、そのための奏演技術を会得することが求められるのではないだろうか。本プロジ

エクトは、かつて「民謡」に対して相対する態度を示した作曲家、ピアニスト、音楽学者が知恵を持ち合って、「アート」としての民謡の再創造と表演の開発に挑もうというものであった。

しかしながら、予想通りではあったが、「民謡」ということばをめぐっては調査研究にご協力いただいた民俗学者や民謡収集家の方々など、現場で長年作業にあたっていた方々と意見調整することが難しかった。協力者の方々のご意見は、他の多くの方々のご意見をも代表するものだと思われた。そこで、われわれはかつての文化人に見習い、本プロジェクトの研究内容にふさわしい新しいことばと「作品」を作ることにした。それが、「茶歌」なのである。ただし、「茶歌」と「新民謡」との違いは、単に前者が茶に関係する歌に限られるというだけではない。われわれは、ジョン・ケージ以後の作曲家が「作品」の概念を問い直したことを受けて、一人の作曲家が創作したコンサートホールという閉じた空間で上演すべき「作品」ではなく、市民参加型の開かれた作品として以後拡張されることを期待しながら、1つのヴァージョンとして提示するものとしての作品を意味するためのことばとして、「茶歌」を選んだのである。

その後、「茶歌」ということばそのものも、われわれの手を離れてニュアンスを付け加えていくことになった。当初は、これを「ちゃうた」と発音していたのだが、イベント主催者が「ちゃか」と読んだことをきっかけに、軽快な響きをもつことばへと変化した。偶然にも、この響きはわれわれからの相談を受けて静岡ウクレクラブ指導者である竹島康博氏が創作した《茶刈機音頭》にも受け継がれた。これは、「ちゃかりきおんど」と読む。しかし、まず歌を聞いたとき、茶どころの出身ではない私は「ちゃかりき＝茶刈機」という漢字変換が出来なかった。その歌詞にも出てくるように、茶刈機の音は「ブーンブン」という機械的な音で、つい数ヶ月ほど前に聞いたラジオ番組では「サイレント・茶刈機があったらよいのに」という投書があったくらい、聞く人によって騒音と化すものである。だが、その茶刈機の音は、茶の産地で育った人々の生活感情を象徴する音といえる。

幸いにも、各イベントなどで実施したアンケートでは、われわれの試みに対する地元の人々からの多くの賛同が寄せられた。「もしかすると、一般の人々にはアーカイヴスよりもアートへのニーズが高いのではないか」とすら感じさせられる結果であった。繰り返しになるが、われわれはアーカイヴスの不備を徹底して改善することも早急になされねばならないと考えている。その原動力を高めるために、逆にアートを普及させることも考えられないだろうか。あまりよいとは言えないが、最近ではソプラノ歌手の本田美奈子が白血病で早世したことを知った人々が、進んで骨髄バンクへの登録を行うようになったという話がある。何かのきっかけがあれば、より多くの人々の力を得ることが可能になるかもしれない。その意味で、本プロジェクトが提唱する「アーカイヴスからアートへ」はこれで終わるわけではなく、「アートからアーカイヴスへ」という次の段階にまで発展させるべき課題が残されているといえる。

(小西潤子)

V. ご協力者の声

V. ご協力者の声

市民参加型をめざしての民謡再創造への試みである本調査研究は、多くの方々のご協力なしでは成立しないものである。ここでは、そのようなご協力者のなかから一部の方々にお願ひして、プロジェクト参加を通じて感じられたことなどを綴ったエッセイを執筆していただいた。これらによって、茶歌再創造に対する各位の思いを読み取っていただきたい。

1. お茶の歌と茶摘み踊り

お茶のでんぐり揉みはこうでが痛い 揉ませたくないませたくない
我がつまに
お茶にきたとて小馬鹿にするな 家は金貸し田地もち
天気よければお茶摘みさんが 赤いたすきで大騒ぎ

むせ返るような新緑の茶園に、出稼ぎの娘たちの華やいだ声が響く。茶摘みの仕事は、紡績工場などでの身を削るような過酷な労働とちがって、牧歌的な雰囲気にも包まれていた。もちろん早朝から暗くなるまでの長時間にわたる作業ではあったが、茶摘みの出稼ぎは、ほとんどの娘たちにとって、ある種の通過儀礼的な側面があった。家から遠く離れた山間部の農家で合宿生活は、楽しみでもあった。だから、茶摘み歌には、暗さがない。

茶摘み歌に限らず、民謡が生まれる背景には労働がある。単調な作業の能率をあげるためである。ポカポカ陽気の茶畑では眠くなる。そんなときに声がよく即興で歌の出せる人は、雇う側にとって貴重だった。その声にあわせ、「やれ、そうだによう」などとまわりの人がいっせいにやすからである。歌の上手な人には日当をはずんだという話もよく聞く。

歌詞にはその時々流行歌を取り入れものや、男女の機微を歌ったものが多い。仕事の中で洗練されていった歌には、やがて余興として踊りがつく。昭和になってからの新作ではあるが、北原白秋作詞の《ちゃつきり節》にも踊りがある。しかし、その所作は茶「摘み」ではない。当時ようやく普及し始めた茶刈鋏で茶を「刈る」姿を模したものだ。だから、「ちゃつきり、ちゃつきり」なのである。

アジア各地でも茶作りをしている民族は、日本と同じように、茶摘みの季節になると大勢のお茶摘みさんを雇う。そして茶畑では同じように歌が歌われた。中国では「茶謡」というが、広西の武寧で清代に記録された歌を意識すると、「南山の茶の木が、一番鳥の鳴く前に芽をだした、今年茶を摘む姉妹は、来年は誰の嫁になっているやら」という雰囲気である。こうした歌に振り付けをした踊りを「採茶踊り」といった。茶葉を摘んでは腰にさげた小さな籠に入れる様子を模したものだ。

茶摘み踊りはミャンマーにもある。この国でお茶作りの民といえば、誰もがパラウン族を挙げる。彼らの本拠地であるシャン州のナムサンという町で見た茶摘み踊りは印象的だった。というのは、日本の茶摘みでは、たいてい腰くらいの高さで茶葉を摘むのだが、こ

の踊りでは茶摘み娘が手を上にあげ、ちょうど木の実を採るような所作をするのである。その理由は、茶畑に行けばすぐわかる。日本と違って、茶樹は上に伸びており、新芽を摘むには手を伸ばさなければならないからだ。

茶摘みの形態は茶畑の仕立て方によって、大きく異なるが、この作業が基本的に娘たちによって担われていたこと、そして期間限定の比較的きつくない仕事であったということから、いずれも内容は明るい。だが、この手摘み作業も、新しい道具の採用によって、さま変わりしていく。「ちゃつきりぶし」が出来たころが、まさにその変革期であり、さまざまな労働に際して歌われてきた土着の民謡も消えていく時代になっていた。

(中村羊一郎)



2. 民謡収集研究を通じて

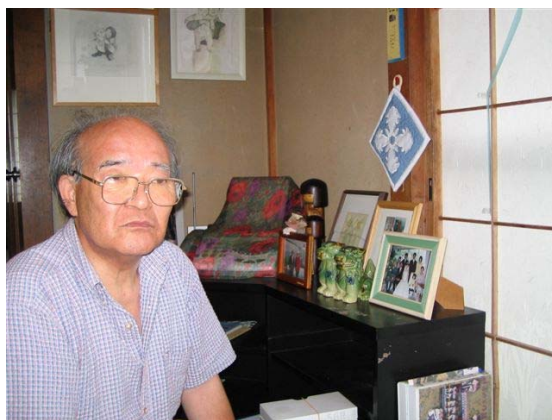
お茶の健康ブームの中、世界に冠たる地場産業への思い、願いは想像に固くないところ です。「茶歌の再創造と奏演」の立ち上げはその社会的ニーズへの呼び起こしとしても大変 意義があります。懇話会での茶歌ヴァリエ1のピアノ曲は作曲家と名演奏家のお二人の先 生による協演で感動そのものでした。その旋律は長い歴史と伝統を取り込んだ駿河節の 茶歌としてまとまっていたと思います。2度にわたるダイナミックな頂点構成への対比的 なあしらいがホット癒されるものがありました。美しい茶畑の眺めでしょうか。県内を二 分するもう一方の遠州節との融合についてもどの様になりましょうか。

お茶の渡来から始まったとはいえ、それ以前のどの様な仕事唄がしかも両地方で茶唄の中 に唄いこまれてきたのか、私には未解決の点ですが民謡の偉大さを感じるのみです。

テーマの基本理念は労働に始まって肉体的労働に終わる—お茶を味わう、聴く、体を動 かしてみんなで楽しむ、労働を知る—という姿勢が現代社会の中で望まれるところです。 それは人間性の発露です。つまりお茶を摘む、揉む、仕上げる長時間の立ち仕事（この約 5時間が一日に3回）そして牛に載せて清水まで「どこの家でも、人を頼んでも、それ が楽ジャーナードスヨ、2時3時遅くとも3時ダネー（起きる時間）」おいしいお茶の裏 には大変な苦労がありました。あの「でんぐり揉みゃ（回転揉み）こう手が痛むよ」あれ だけは「やらせたくないわが^{つま}夫に」「お茶がよれずに身体がよれた、お茶と身体が代われば よい」本来人は働くだけでなく人間らしい生活を追い求め、解放を、発散を、唄を、踊り

を手に入れてきました。それは人間としてのDNAであるとは高野山の和尚さんとの会話ですが、伊豆の妻良の港の遠い昔のお寺のお念仏の中から、やがて堂内を鉦、太鼓、唄も加わり、更に浜に降りて踊り「盆踊り」となり青年男女村中で踊り続けています。村で大事にしている「高野山物語」も笛、太鼓、踊りで大声で唄われていてすばらしい唄。全て現地での保存会長さんの話でした。世界お茶まつり in 静岡（於：グランシップ）では9つのバンドがお茶唄で唄いまくりました。どこにもある奏演一踊りの中にお茶歌詞付の振り付け踊りがあっても楽しいです。お茶のハッピーのお兄さんお姉さんも先日沼津キラメッセでは農業青年バンド7人・野菜を背負ってステージに上がり創作曲でたのしく大好評で農林事務所推薦出演のもと楽しませてくれました。本プロジェクトに大きな成果を期待しています。

（高崎譲寧）



写真Ⅳ-1 民謡資料整理中の高崎譲寧氏
2004年6月25日 於：沼津市の同氏ご自宅にて 撮影：大槻寛

3. 芽吹く^{ころ}季節に

今から15年以上前の話になりますが、私は県立高校の音楽教師として佐久間町(現浜松市)で過ごすこととなりました。当時、いわゆる僻地校といわれる学校は、新規採用教員の登竜門という感があり、大学を出たばかりの新米教師がほとんどでした。私もご多分に漏れずその中のひとりでしたが、記憶が正しければ、私の在任期間中に全職員の平均年齢が20代になった年もあったと思います。そんな学校でしたから、生徒と教師の年齢は非常に近く、生徒は若い先生に何かと挑戦してくるし、先生の方は経験が乏しいから、なんだか毎日いろいろな問題が起こり、さながら中村雅俊が演じた青春ドラマのような日々でした。

生徒数の少ない学校でしたから、芸術科目は音楽だけの開設で、必然的に私は全校生徒を相手に授業をしていました。このあと赴任した学校では、卒業するまで一度も話したことの無い生徒もいましたから、知らない生徒が全くいないというのは素晴らしいことでした。

音楽室から望む自然の美しさや時には猛威に目を奪われる日も少なくありませんでした。そのうちにそんな四季の移り変わりをただ眺めているだけでは飽き足らなくなってきたことは至極当然な成り行きでした。赴任 2 年目ともなると創作活動の一環などともっともらしい理由をつけては、生徒と共にギターを担いで音楽室を飛び出して行きました。『サウンド・オブ・ミュージック』のマリア先生のように。夏には天竜川の清流で水遊びを、秋には小高い山に出かけては松茸狩りと称した散策に、それはもう自然を熟知している生徒があっちへこっちへと連れて行ってくれました。

学校には茶園があって、5 月の連休明けのころになると、みんなでお茶摘を体験するなんて風情ある課外活動もありました。こんな経験はちょっと他の学校ではできるものではありません。当然ながら、お茶摘でも手馴れている生徒に教えてもらいながら、時間の経つのも忘れてやわらかい新芽を一葉一葉摘んだものです。

佐久間で過ごした 7 年間を振り返ってみると、一生懸命教えていたつもりのようで、実は様々な事を生徒に教えてもらっていたんだなと思わずにはいられません。あの環境だったら、きっと新しい茶摘歌なんかも、ごく自然に生徒と一緒に楽しめたんじゃないかと、今となってはちょっぴり残念に思います。

やわらかな新芽が芽吹く季節になると、あのかけがえのない思い出の詰まった山の学校のことを思い出します。

(山田正訓)



4. 《ウクレレ茶歌》の作詞・作曲について

最初のお茶との出会いは、当時空襲で浜松の実家を焼け出され、牧ノ原でお茶工場をやっている親戚にやっかいになったのが始まりです。都会育ちの私にとって、目の前にまるで大海原のように広がるお茶畑とその緑の美しさには圧倒されました。そして刈り取った新芽が工場のコンクリートの土間に広げられ、その上で転げ回って遊び、工場のおじさんに怒られた私の小学校 3 年生の頃を今でも思い出します。

さて音楽との出会いですが、4～5 才のころに伯父からヴァイオリンを教えられた記憶があり、その伯父というのが、その頃東京声専音楽学校〔現：昭和音楽大学〕を出て、NHK 交響楽団（当時は大日本帝国交響楽団、と言った様な気がします）に所属していて、友達は楽しそうにお宮さんで遊んでいるのに、なんて思ったりしたものです。

私どもの時代の音楽はハワイアンから入ったのが大半でした。テレビも無い時代ですが夕方になると毎日の様にラジオから流れるバックキー白方とアロハハワイアンズのステイールギターの甘く切ないノリの良い音色に聞き惚れたものです。

話を本題に戻しましょう。小生もなんとか人並みに定年を迎え世間で言う第二の人生をどうするか、そんな時、小生の前歴を知ったある人から声を掛けられ、それを生かし若い時から音楽を楽しみたいが色々な事情で出来なかった人たちに役立たせたらどうかのさそいがあり現在にいたっています。日の目を見ないオリジナル曲も懷に暖めてそれなりに有るが、ウクレレ茶歌もその内の一曲で、少しでもお役に立てたらと今日もまっています。

(竹島康博)

5. 箏のご縁で

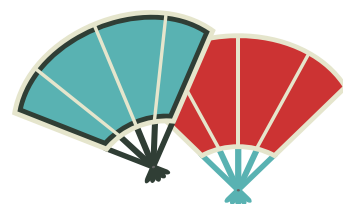
「静岡大学で日本音楽の面白い集中講義をしていますから、来てみませんか？」一数年前、浜松で母・姉と共に主催した「宮城道雄生誕100年記念箏曲演奏会」のゲストとしてお招きした安藤政輝先生（現・東京芸術大学教授）から、打ち上げパーティの席でお話を頂いたのが、“ご縁”の始まりでした！

さらに辿れば、この演奏会の直前に96歳で大往生を遂げた私の祖母は、かつて静岡大学で洋楽（ピアノ）を学び、30歳を越えてから宮城道雄先生に師事して、箏曲に転向しているのです。それがなければ、私の母も宮城道雄先生に師事することもなかったし、勿論、私が箏の世界に身を置くことなど有り得なかったことでしょう。

現在《茶歌ヴァリエⅡ》は、五線譜から縦譜へと姿を変えて…つまり箏の曲に編曲されて、多くの小中学生に演奏される瞬間を、今か今かと待っています。原曲の持っている伸びやかでのどかな雰囲気はそのままに、新しい命のふくらみを感じさせます。一見素直で優雅に見えるこの茶歌は、意外なほど力強いということを、皆さん気がついていらっしゃるでしょうか？さらに付け加えさせて頂ければ、一筋縄ではいかない頑固さも持ち合わせていて、それが大きな魅力です。

この世で一番率直でスルドイ評論家である子供たちの反応が楽しみでもあり、怖ろしくもあり…、といったところです。これから私がお手伝いできることは、「茶歌」がこれからさらに多くの素晴らしいご縁を結び、小さな一歩から大きな一歩へと成長していく背中を後押ししていくことだと思います。“袖振り合うも他生の縁”なのですから。

(吉田道美)



6. 創造へのアプローチ—箏曲への編曲を通して—

「♪シャシャ・テン・トン、トチ・トテ・トテ・トチ、コロリン・シャン…」。幅広い、響きの良い階段を上り終えると、賑やかな話し声や笑い声の喧騒に混じって、優美な箏の音が聞こえてきた。その調べに引き寄せられるようにして歩みを進めると、音楽室では、まだ昼休み中にもかかわらず、生徒達が、午後の選択音楽の授業に備えて箏の練習に励んでいた。ここは浜松市立天竜中学校。この日私は、静岡県に伝わる茶歌をもとに大槻 寛氏が作曲した「茶歌ヴァリエ」を学校教育で活用すべく箏合奏用に編曲するにあたり、事前に現場での実情を把握するとともに、編曲への何らかの手がりを得るため、箏を音楽教育に積極的に取り入れている同校を訪問した。

授業の中で生徒達が取り組んでいた曲は、2年生が宮城道雄作曲「北海民謡調」、3年生が山本邦山作曲「箏・十七弦による小組曲」および森岡 章作曲「みずうみの詩」。いずれも初歩の段階にしては高度なテクニックと音楽性が要求される曲であるが、生徒達の手は、時に左手も交えて13本の弦の上を滑らかに行き交い、押し手やすくい爪等の奏法も器用にこなしていた。いわゆる今時の子供達が日本の伝統楽器に真摯に向き合っている姿は、少なからず私に驚きと感動をもたらすとともに、私がこの先彼らのために行う創作への意欲を大いに刺激した。

第二次世界大戦後、日本は急速に欧米化への道をたどり、世界有数の技術および経済大国へと発展していったが、一方で、我々日本人は、自国の伝統文化に対する関心が希薄となってしまった。音楽に関しても、現在、日本の一般社会においては、日本古来の民謡や伝統音楽を耳にする機会は稀であり、しかも日本人のほとんどが、自国の伝統楽器に触れることなく過ごしてしまうのが実情である。そのような状況の中、2002年度から、学習指導要領の改訂により邦楽器が学校教育に導入され、子供達に自国の楽器を学ぶ機会が設けられたことは、自国の文化を伝承していく上で大変意味深いといえよう。

では当の子供達は、今や日常生活からは遠い存在となってしまう日本音楽や邦楽器に、どのような思いで取り組んでいるのであろうか。天竜中学の生徒達にインタビューを試みた。以下は、その応答である。

- ・ 普段は西洋楽器の方が身近なので、このような古い(伝統的な)楽器に触れるのは良い機会だと思う。
- ・ 先輩達が演奏しているのを聴いて「カッコイイ」と思い、自分もやってみたくなった。
- ・ 弦が13本しかないにもかかわらず、多彩な音を奏でることができて面白い。
- ・ 全く知らなかった楽器を、次第に様々な奏法で弾けるようになっていくのが楽しい。
- ・ みんなで合奏することが楽しい。
- ・ 初めは合奏しても皆の音が揃わないが、練習していくうちに呼吸も合い、完成していく過程に、やりがいを感じる。
- ・ 古い、ゆったりとしたリズムの曲(いわゆる古曲)より、現代的でノリの良い曲が好き。

- ・ 簡単な曲より、少し難しいぐらいの曲の方が、チャレンジする喜びを味わえる。

これら生徒達の答えから、彼らは、現代っ子である一面を呈しながらも、箏を学ぶモチベーションを彼らなりに展開しているのがうかがわれる。生徒達は、古の楽器が奏でる伝統的な響きに一種不思議な力を感じているようであり、また、箏演奏の習得を通して、未知のものを知る喜びや、努力して得られる達成感を味わっているようでもある。前者は音楽的立場から、後者は教育的立場から、箏を学ぶ意義を提示していると言ってよいだろう。

このように、箏の享受を、それぞれの意義を見出しながら楽しんでいる生徒達に対し、編曲を提供する側は、その作品を通して何を伝えたらよいだろうか。インタビューにおける生徒達の生の声にも耳を傾けつつ、「茶歌」の、「中学生」による、「学校教育の場」における「箏による表演」であることをふまえて、音楽的且つ教育的な創造へのアプローチを、次の4つの観点から模索した。

1. 「茶歌」イメージの表出

古来日本人は、自然とのかかわりを大事にしてきた民族であると言われている。音楽についても、その奏でられる音は自然素材と密接に関係しており、楽器は自然界の音を再現する媒体として存在していた。

《茶歌ヴァリエ》の編曲では、茶木の葉のざわめき、爽やかな風の音、鳥のさえずりなど、のどかな茶畑の風景がイメージできるような表現を模索することによって、日本人が培ってきた、音と自然に対する感覚を喚起していこうとした。

2. 楽曲形式への模索

日本文化の根底に流れる形式原理を表す概念に、「序破急」がある。これは、もともと舞楽の3部構成を表す言葉として、雅楽とともに中国から日本にもたらされたが、のちに能をはじめとする芸能、箏曲や地歌などの音楽、さらには演劇や武道にまで、それらの時間的構成をなす基本原理として広く浸透していった。

「序」はゆったりとした導入、「破」は主要な展開、「急」はテンポの速い終結を指している。この伝統的な原理を編曲に取り入れることによって、西洋音楽とは異なる、日本人の時間芸術に対する概念を伝えることはできないかを模索した。

3. 「お箏らしさ」の演出

箏曲として編曲するからには、箏独特の奏法を意識しなければならないのは言うまでもない。学校教育の場で指導することのできる範囲内で、トレモロ、弾き連および流し爪、すくい爪など可能な限りの技法を盛り込み、箏の魅力を発揮できるよう努めることにした。

また、箏特有のフレーズの「型」も、用いるべき要素であろう。弦を順次上行あるいは下行するパターン、2度音程によるかき手フレーズ、短いフレーズの同型反復などを適宜含める事によって、「お箏らしさ」をかもし出していくことに留意した。

その他、左手の使用や押し手などによる音色変化にも着目し、様々な響きを楽しめるような編曲でありたいと考えた。

4. 中学生が演奏すること

今回の編曲は、中学校の音楽の授業での援用を目的としているため、それに見合う技術的・音楽的なレベルを考慮せねばならないだろう。あまり高度すぎると意欲を減退しかねないが、平易すぎるのも、日ごろ多種多様な音楽を聴いて耳が肥えている昨今の中学生にとっては、面白味のないものになってしまうだろう。その辺の難易度のさじ加減が難しいと思われる。さらに、伝統的な書法の中にも、現代的な要素を融合させることによって、現代の中学生の感覚に沿う編曲である必要性も感じた。

天竜中学の生徒達へのインタビューにおける「ノリの良い曲」、「カッコイイ」、「少し難しいぐらいの方がチャレンジできて良い」という声も念頭におきながら、彼らが演奏する際のモチベーションを刺激できる編曲を模索する必要があるだろう。

以上、「茶歌ヴァリエ」を箏曲に編曲するにあたり、中学校の授業で実際に生徒達と交流することによって、さらに、日本の伝統音楽を再認識することによって、いくつかの方向性を見出すことができた。「民謡の再創造とその表演」というのテーマのもと試みた箏曲への編曲が、教育現場において、民謡の伝承にとどまらず、自国の音楽や文化への理解を深めるものへと発展する可能性をそなえたものとなることを願っている。

(小菅由加里)



写真Ⅳ－２ 茶歌編曲合奏に取り組む天竜中学の皆さん（１）
2006年3月 於：天竜中学 撮影：小菅由加里



写真Ⅳ－３ 茶歌編曲合奏に取り組む天竜中学の皆さん（２）
2006 年 3 月 於：天竜中学 撮影：小菅由加里

楽譜

茶歌ヴァリエ II 作曲：大槻 寛

謝辞

本研究調査を進めるにあたってご協力いただいた高崎譲寧、中村羊一郎、葉桐精一郎、山田正訓、吉田道美、吉田理世、須山由利子の各氏、《茶歌ヴァリエⅡ》をもとに中学生が演奏可能な箏曲に編曲していただいた小菅由加里氏、お時間を割いて快く取材に応じてくださった斉藤善樹、風間ますみ、藤田文敏、西村予史男、大草省吾、山村美沙緒、朝比奈とし江、前島重雄、栗田米一、落合宏雄の各氏、視察訪問先でご丁寧な対応をしていただいた各博物館等スタッフの方々、演奏表現に欠かせないピアノの調達をはじめ、ウィーンとニューヨーク支店での調査の便宜を図っていただいた（株）浜松ピアノセンター・吉澤直記社長をはじめとするスタッフの方々、アンケート調査にご協力いただいた市民の方々をはじめとするここでお名前をあげることはできなかった多くの皆様、シンポジウムを提供していただいた日本音楽表現学会に対して、この場をお借りして感謝の意を表したい。また、聞き取り調査に同行し粘り強くテープ起こし作業に携るなど他のご協力をいただいた青野友美、今村圭、小野恵子、北田裕亮、志村朋子、ツォク、滝上裕美、寺崎庸、土井恵、野田明日香、細澤こころ、森有世ら静岡大学学生のみなさん、そして科研申請時から議論を重ね、助言、アドバイスをし合いながら研究を共に推進してきた分担者。大槻寛、小西潤子各氏にも心から感謝の意を表したい。

(柳沢信芳)

平成 16 年度～17 年度 科学研究費補助金基盤研究 (C)
研究成果報告書 (課題番号 16602004)
静岡県の民謡再発掘とその現代的再創造に関する調査研究
ーアーカイヴスからアートへー

発行人： 柳沢 信芳

〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836 静岡大学教育学部
Tel: 054-238-4647 e-mail: eenyana@ipc.shizuoka.ac.jp

発行日： 平成 18 [2006] 年 3 月 31 日

発行所： (株) 黒船印刷

〒*** 静岡市駿河区登呂*****